

崎門学報

第十号

平成 29 年 7 月 1 日

崎門学研究会



目次

- 一面 靖献遺言を読む(補)
- 六面 崎門列伝(8)鶴飼録斎
- 八面 活動報告
- 十三面 忠臣蔵論
- 十五面 若林強齋「天学講義」を読む
- 十七面 有馬新七論

『靖献遺言』を読む(補)

巻の四、顔真卿

次は巻の四の顔真卿です。顔真卿は字を清臣と云い、琅邪臨沂(現在の山東省臨沂県)に本籍を置く顔氏の出身です。この顔氏は、孔子の弟子として有名な顔回を輩出し、代々学者や能書家を輩出してきた名門であり、真卿もまたシナを代表する書の大家として知られています。唐の玄宗の治世に、平原(現在の山東省済南府平原県)の太守を務めていたとき、河北三道(平盧・范陽・河東)の節度使(辺境防衛の任に当たる)であった安祿山が反乱を起こし、真卿にも河北で官軍を防ぐよう命令してきましたが、真卿は都長安に使者を派遣して玄宗に祿山謀反の事を奏上し、祿山からの使者を見せしめに斬って賊軍との戦いに備えました。

当時、破竹の進撃を続ける祿山の軍勢に対して、河北諸国は悉く靡き従い、玄宗は「河北二十四郡にまったく忠義の士はいないのか」と落胆しておりましたので、真卿の上奏を聞いた玄宗は「朕は顔真卿がどんな様子をしているかを識らないのに、よくもこの様に



顔真卿

忠義を尽くしてくれる」と言つて大いに喜んだといひます。

同じ頃、真卿の従兄である顔杲卿は常山(現在の河北省正定府)の太守を務めておりましたが、杲卿もまた兵を起こして賊を討とうとしておりました。真卿は杲卿に使者を送り、河北から都長安への西進を続ける祿山の退路を遮断するよう連絡してきたので、杲卿は謀略を以て河北の要地である井陘口と饒陽にある敵を追い散らしたので、河北の十七郡はたちまち朝廷に帰順し、祿山は長安に入る関門である潼関を攻めるのをやめて洛陽へ引き返しました。しかし、杲卿は兵を起こしてまだ日も浅く、守備の態勢が不十分であったため、祿山の賊將、史思明による突然の来襲によって常山は落城し、杲卿は捕らわれて身柄を洛陽にある祿山の下に送られました。祿山は、

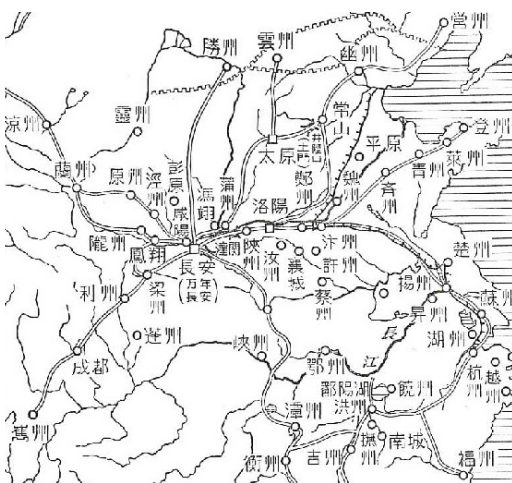
自分が天子に申し上げて杲卿を常山の太守にしてやったのに、杲卿が自分に従わないのは何故かと責めたのに対して、杲卿は、もともと宮州(南満州の地)の羊飼いをしていた夷狄に過ぎなかった祿山を河北三道の節度使に任命した朝廷の厚恩に叛いて謀反を起こしたのは何故か。自分や祿山の禄位はみな唐のものであり、謀反を起こすのは国賊であると答えたので、祿山は激怒し、杲卿をなぶり殺しにしましたが、杲卿は死ぬまで祿山を罵るのを止めなかったため、祿山は杲卿の舌を鉤で引き切り、顔氏の一族三十数人を皆殺しにしました。



顔杲卿

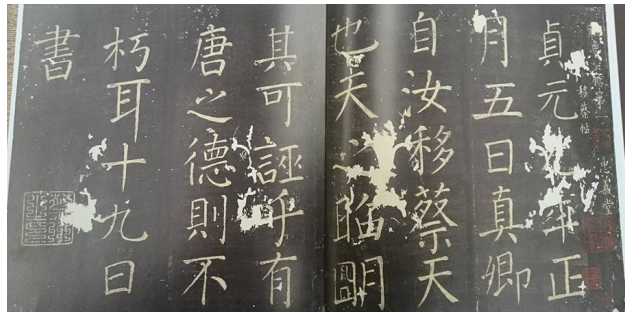
常山の陥落によって後方の憂いがなくなった祿山は、ついに潼関を陥れて長安に迫り、玄宗は蜀に出奔します。これにより、玄宗の太子亨が帝位に就いて肅宗と号しました。綱齊は、この肅宗の即位を問題とし、『講義』で次のように述べています。「此時、玄宗蜀の国へにげられたる道にて、太子の供せられたるに言はるゝは、我は蜀へのく間、其方は跡に残りて天子の位に即き敵をふせげと云置て行かれたり。其後群臣いづれも進めて位に

御即きなされよと云ふとき、終に位に即かれたぞ。初めは事の外玄宗の前では辞退せられたれども、是にては遂に位に即く。此事どうでも肅宗の誤ぞ。平生さへなるに、別して乱世の最中に親は流浪して走行くに、其跡にて推して位に即けば、どうでも奪たになるぞ。尤も玄宗の言付とは云ひながら、肅宗何分にも辞退して申されたらば、何しに玄宗の無理やりには言はれぬはづぞ。下地はすきなり、御意は重しと云ふ類にて、幸にせられたると疑がかる。それで此論あるぞ。其ならば天下の大将として下知は誰がせふぞと云へば、さればのことよ、固より天下は玄宗の天下也。肅宗は太子なれば、玄宗の名代として下知をするに誰か異義を云ひ手があるふぞ。こゝで肅宗が人欲に溺れて父子の義理を破られた、残多ことぞ。」君命によらざる即位は、君臣の義に悖るといふ事です。



さても、肅宗は、真卿を工部尚書兼御史大夫に任じ、また全国に恩赦の書状を発して各軍を督励したので、官軍次第に形勢を挽回し、長安と洛陽を回復して唐朝は再興するを得ました。かくして朝廷に復帰した真卿は、改めて御史大夫に任じられました。御史大夫とは、官吏の邪悪を糾察弾劾する目付役のことです。直言を憚らぬ真卿の態度によつて百官は肅然として秩序を回復しましたが、それが故に李輔国や元載と云つた時の権臣たちの忌むところとなり、真卿は幾度となく讒言誣告による左遷貶謫の憂き目に合いました。そして、ついに徳宗の治世に盧杞という人物が大臣になると、彼はますます真卿の剛直を憎み、徳宗に勧めて、汝州（河南省臨汝県）で謀反を起こした節度使、李希烈の宣慰に真卿を派遣せしめました。周囲は真卿の身の上を按じ、彼の汝州行を引き留めましたが、彼は君命に逆らうわけにはいかないとつてそのまま出発しました。汝州に着くと、希烈は真卿を脅して降伏させようとしたのですが、真卿はむしろ希烈の不義を責めて臆しませんでした。その内、希烈の部将周曾等が希烈を排して真卿を節度使に奉じる企てが発覚したため、希烈は同様の事態が起ることを避けるため、真卿を自らの本鎮（本籍地）である蔡州（現在の河南省汝南県）に移しました。この蔡州への移送に際し、真卿が自らの死を悟つて記したのが、綱齋が真卿の遺言として掲げる『移蔡帖』です。以下に本文と近藤先生の正訳を掲げます。

「貞元元年正月五日、真卿、汝より蔡に移る、天なり、天の昭明、それ誣ゆべけんや。有唐の徳は、則ち朽ちざるのみ。十九日書す。」



移蔡帖

貞元元年正月五日、真卿は汝より蔡に移された。自分は李希烈のためにやがて殺されるであろうが、これは天命であつて、いかんとも致しがたし。しかし善悪是非を明らかに見てをられる天の眼は、希烈といへども誣ひ欺くことができない。されば希烈は一時勢力を持ち得ても天下を得られるはずはなく、唐室の徳は深く民の心に徹してゐるから、亡びることはないのである。十九日書す。

さらに、希烈は、自ら帝位に就こうとして真卿に即位の礼を聞いてきましたが、真卿は、自分が覚えてゐるのは諸侯が天子に朝覲する（ちようけん）ときの礼式ばかりで、謀反人が即位する礼儀

など知らないと答え、度重なる脅迫にもついに屈しなかつたので、結局、希烈は人を遣わして真卿を殺させました。享年七十六歳。

以上が、巻の四に記された顔真卿の事績と遺言ですが、綱齋は同巻の付録として、真卿と同時期に活躍した張巡の伝を掲げ、その遺烈を顕彰しております。後述するように、この張巡は我が国で、楠正成になぞらえられることが多く、忠義の問題を考える上で重要な人物であり、綱齋も巻の四の後半部分の大半を、この張巡の伝に割き、楠公との比較に説き及んでおります。そこでは以下では、それに見て参ります。

張巡について

張巡は、真源县（現在の河南省鹿邑県）の令（長官）をしておりました時、安祿山が反乱を起こし、上司にあたる誰郡（安徽省亳県）の太守、楊萬石は祿山に降伏して、張巡にも賊を迎えるように命じて来しました。これに反して、巡は、県下の吏民を率いて討賊の兵を挙げ、賊將令孤潮の本拠がある雍久を攻め、力戦してこれを退けました。ところが、潮がまた数万の兵を率いて城下に至ると、巡は門を開いて突進し、激戦すること六十余日、大小三百余戦に及びました。巡は潮と旧知の仲であり、城下で顔を合わし会話を交わすこと平日のようにありましたが、そのなかで潮が巡に「唐の天下は過去のものである。足下は、堅く城を守っているが、それは誰の為にして

いるのか」と問うたのに対して、巡は「足下は、平生、忠義を以て自ら任じているのに、今日の態度を見るにその忠義はどこに行つてしまったのか」と答えたので、潮は愧じてその場を退きました。



張巡

かくして潮の攻囲が久しくなる内に、朝廷の消息も不明となり、潮は巡に書状を送つて降伏を勧告して来しました。そこで巡の部将六人は巡に建白して、兵勢は敵せず、もはやお上の存亡も不明になつてしまつた上は、降伏が最上の策であると上申して来しました。これを巡は表向き許諾し、翌日、堂上に天子（玄宗）の画像を設置し、將士を率いて拝礼したので、一同感涙にむせびました。その上で、巡は、先の六將を前に引き出して責めるに大義を以てし、これを斬つたので、士氣はいよいよ振るいました。綱齋は、張巡が孤立無援の状況下で主君の消息が不明となつても、抗戦を続けたことを重視し、『講義』のなかで「此のところ、大義の係る所、若し審にせずんば、忠義の士たりといへども、時によりて迷ふこと多かるべし。いかなれば人々戦をするも、皆我主の御為と思ひ力を尽すことなれば、もはや君已に亡びたりと聞か、又は存

いこともない。我は天子の為に敵賊をうつ合点で軍を起したるからは、天子の御無事に御座あるは固より目出度事、好し天子に何事かありて亡びさせられたりとも、我目ざす処の敵があるからは、邪でも非でも、そいつを根から葉から討亡さざる間は、共に天地を戴かざる存念をすへたるは、張巡が志なり。それぢやによつて、首尾能く敵を亡したらば、何れにても我主の筋目の君をとり立て天下を渡すべし。それも無くんばそれなりにて可果（果つべし）。ちつとも都が亡びたほどに主が知れぬほどと云て、手前の戦をする義を見合せてすることはいらぬぞ。能く古今をならして見よ、能き大將は皆是ぞ。」と述べ、また強齋も『講義』のなかで「敵は大勢、味方は小勢、相手に成ることでも、張巡は何であれ天子の命で城を守りて居るからは、命なりに死する

さて、賊の攻囲は数か月に及び、その兵勢は数万に達したのに対して、巡の軍勢はわずか千余に過ぎませんでした。巡は戦う度に勝ち、ついに屈しませんでした。そこで賊は寧陵を襲つて巡の後方を遮断しようとしたが、巡はついに寧陵を守つて敵と対峙しました。また睢陽すいように転じてからは、太守の許遠と共に賊と戦い、これを敗走せしめました。

巡は戦いで得た牛馬などの戦利品をことごとく兵卒に分け与え、将士を激励したので彼らはよく奮戦しましたが、やがて賊の攻撃が激しさを加え、城中の糧食が尽きると、米に茶紙や樹皮を混ぜて食う程の有様でした。このため士卒は消耗と飢餓に苦しみましたが、巡は機略を尽くして敵を撃破し、過酷な籠城戦が続きました。当時、近隣の諸将は、事態を傍観し巡の救援を承知しませんでした。巡はその將軍、南霽雲なんせいうんをして城の囲みを突破し、臨淮の賀蘭進明の下に派遣して救援を求めさせましたが、進明は、巡と遠の功績を嫉んでこれを承知せず、むしろ霽雲を饗応してこれを引き留めようとしたので、霽雲は自ら帯ぶる刀で一指を断ち、使者の命を果たした印としました。巡は遠と協議し、もし睢陽の城を捨て去れば、江淮全域を失うことになるとし

拈。

※張巡は、我が国において、楠公こと楠正成に準えられることが多く、それは例えは、三宅観瀾が記したとされる『大日本史論贊』の「楠正成伝贊」においても、「楠正成の兵を用ふるは、機を決し勝を制し、孫呉に髣髴して、而も忠勇壯烈、殆ど唐の張巡と相似たるあり。巡は雍久を出で雎陽を守り、正成は赤坂を去りて千劍破に拠る。皆孤墉（孤城）に嬰りて賊の喉牙を鯁す。．．．寡を以て衆を撃ち、奇を出して窮りなし。．．．巡は城陥りて死す、正成は鑾輿（らんよ、天子の輿）を奉迎し、首

として推奨を蒙る。斯れ則ち異となす。湊川の戦に、正成、将に自殺せんとして、正季の、生に託して敵を滅ぼさんと欲するの語を聞き、笑を含みて地に入る。其の巡の死に臨みて、厲鬼となり、以て賊を誓ふに

視^{なぞら}ふるに、又何ぞ相似たるや。此れ其の忠義の心、天地を窮め、万古に亘りて滅すべからず。身は死すと雖も、而も死せざるもの、固より自若たり。」とあり、また頼山陽の『日本外史』においても、「後の論者、或はこれを唐の張巡に比する者あり。巡は全盛の唐室を戴き、狂胡（安祿山）の偏師（副将、令孤潮、尹小奇）を拒ぐ。二顔、これが先をなすあり、許遠これが助をなすあり。而して江・淮を遮蔽し、城を守つて死を致せるに過ぎず。公を以てこれを視ぶるに、勢の難易、功の大小、豈に日を同じうして語るべけんや。」とあるので判ります。この通り、『論贊』と『外史』は共に、張巡と楠公に共通点を認めつつも、その規模においては、雲泥の違いがあると述べております。

崎門における楠公論の展開

近藤啓吾先生によると、我が国における楠公に対する評価には毀誉褒貶があり、徳川光圀が「嗚呼楠公」の石碑を建立した当時においてすら、その専らの評価は、由井正雪の楠木流兵学に代表される様な、楠公を卓越した兵法家とするものか、桜井の別れ、湊川における壮烈な最期に示された忠節を称し、公を武將の典型、武士の鑑と見なす意見が大半であったと云います。（『四続紹宇文稿』所収、「楠公論の展開」。これに対して、綱齋は『講義』のなかで、先に張巡が、主君の消息不明

となつた後も戦い続けた事と楠公の忠烈を比較し、公の偉大なる所以を次の様に説いております。いわく、「我が国にて楠正成が赤坂の合戦のときは、後醍醐天皇は已に笠置の軍に利あらずして、是を隠岐国へ遷し奉て、実に存亡の沙汰たしかに聞へず。それでも楠はわきひら見ずにかまわず戦ふ。此時に楠が心にも、天皇の御存命危きことは知て居れども、それぐるみにかまわぬぞ。……正成が心には、設^{たとひ}天皇此時若^も自然のことありとも、かまう合点では無し。其かまわぬと云も、後醍醐天皇には心がないと云うことではない。惟其存亡ゆへに思ひちがへることはせぬ。天下の為にする軍で思ひ立つからは、どこまでも我命のあらん限りは独ぼうしになりても、赤坂の城で一僕使はずして朽果るとても、敵を滅ぼすまでは中々気散じに見合すことはせぬぞ。それが大義ぞ。」すなわち、主君たる後醍醐天皇の消息が不明になつても、賊を滅ぼすまで、死力の限りを尽くして戦つたことにこそ、その偉大なる所以を見出しているのです。ですから、千早城であれだけ奇策を駆使して戦い抜いた楠公が、その後、湊川の戦では、まだ逃げ落ちて再起を図る道もあつたにもかかわらず、あつけなく自害し果てたことについては、その誠忠を確信しつつも、いまだ遺憾なしとしなかつたのです。この点について、綱齋は、彼の学話を筆記した『箚録』において、次の様に述べています。「唐の張巡睢陽の戦に自害せざるも、後れたるに

非ず、文山の執へらるゝまで戦ひたるも、主を思ひ宋を存したきの一念の忠義の実なり。近代武士の義の吟味は、只後れを取らざるの、名を汚さぬのと云までにて、つまるところは、小さき一分の意氣づくよりさきなる事、大準に当て、云べきことなきは、皆此誤なり。楠などはけ様の名に拘り、意氣までの人間にてはなけれども、公家衆は全体まゝくをふの様な体にて、何事を云ても逆も用ひられず、高氏は西国を駆催催して来る、其禦ぐべき道をいへど、坊門宰相如きたわけを尽す故、最早生きて天子の御難儀になり給ふべきを見るに忍びず、総並に泥まぶして居られず、世の中、今は是迄と存じ切たる心、其の感慨、不忍の歎き、千載の忠義の人の涙をこぼすに勝ざる親切の忠臣なり。されば此世の中、今は是迄なりと思つてと書る段こそ、記録の能く得たる。思とは詞に著はるゝ、上の余詞なれば、楠が真言なるべし。此楠が忠義の心を不知者は、最早是ぎりにて、吾もよい死を取たがましと、あぐみ果て思棄たる様にとれば、大いに楠を知らずと云ふべし。惓々惓惓、忠能徹日月の心、誠に此一言にあり。扱又残念なるところも此一言にあり。此上ながら、七十騎にてもかけ抜け、いつまでも七代生れかはりても、朝敵を亡したきといふ詞の存念を遂げば、楠が材略にて大和河内に引込て、其時を俟ば、不成はいつ迄も天命勿論云に不及、何様の義も可為出事なり。此即屈原が宗国の亡るを見るに不忍して汨羅に身を沈められし心

と事は替りて同日の談にして、忠にして過たると議せらるゝも此にあり。又千載の一人と称せらるゝも此にあり。嗚呼君臣の義の吟味不精しては、さてく／＼なりがたきこと、ケ様の事にて知るべし。」すなわち、楠公の忠死は、小さな武士の一分ではなく、屈原が汨羅に身を投じたのと同じ、「惓々惓惓」の至誠に由るものとしながらも、いささか死に急いだ感があるのは「残念」にして「忠にして過ぎたる」ことであると評しているのです。

こうした綱齋の楠公観について、強齋は、彼の学話を弟子が筆録した『望楠所聞』において「楠の出処の正しきを知るべし。懇勤に万里小路藤房卿を以て頼み思召と云勅定で出られた。あれほどになふては、大義を引き受くることならぬ。軽々しきことでは、大義を引受くることならぬ。軽々しきことでは、大任の任にあたること難成（成り難し）。唯勿体を付て云ことでない。賢者の出処を見るべし。扱参内して段々申上らるゝ旨も、見たがよい。慥かな云分、何時でも私が身が存命で居るとさへ聞召さば、終には聖運を開かんと思召と。あの慥かに任じ切た云分、其より赤坂城に籠らるゝ様子、其後千破の城に籠りて居る内に、主上は隠岐に流されさせられたぞ。あそこで大体なものなれば胡乱^{うらん}すること、何を頼みにする軍と云ことじややら、あてどがない。其上加勢するものあらばなれども、誰加勢する者もない、楠唯一人、天下不残皆鎌倉方なるに、あの様に天下の兵を引受て合

戦をすると云は、たゞでない。主上は流されさせられふとも、譬へ崩御なされふとも、一旦君に頼れて朝敵を征すると云が己が任に当りて、どこ迄も死して後止んと云様にあるからぞ。主上は流されさせらるゝと云ても、其時は社稷を重しとするの合点で、あのようにありたものぞ。太平記に楠が所存の程こそ不敵なれと云たは、能く書いたぞ。誠に纔の小城に僅かの小勢を以て天下を引受て戦ふと云は、右の所存でなふてはならぬこと。唯軍

上手じやの謀計がよいのと云ことでないぞ。」

〔望楠所聞〕と述べ、その前半部分において、楠公の孤忠を称えた綱齋の師説は継承しつつも、楠公の死を「残念」、「忠に過ぎたり」とした後半部分については、楠正成が湊川の討死は当らぬ、どこまでも性命を全ふしてこそなれ、討死しては当らぬ、正成だけじやと云たがるぞ。其程なことを合点せぬ楠ではないぞ。定てあそこに死なでならぬ其時の事体なるべし。どふもあとから論じられぬ。譬へあそこの死は当るにもせよ当らぬにもせよ、先づあれほどの忠義を立て、あれほどにして見たがよいぞ。どうした事体で死んだことやら知れもせぬことを、色々と云て、正成に疵付るはないことぞ。そふ体書を見るには、加様なことが大事ぞ。纔なことを掲げて色々と云んよりは、其人の惣体を推して見るようにしたがいぞ。孔子の三都を討たせらるゝも、聖人に間然せふことはない筈ぞ。然るに三都を討つとて、負て帰らるゝ、不調法に見ゆる。

圍之不克と云てある。何ともどふも済まぬことぞ。聖人の軍に軽々しきこともない筈。負て帰るなど云やうなことはありそむないものなるに、あの様な事体、どふしたことでやら知れぬことぞ。楠も出処から見ても、何から見ても残る所ない、間然ない楠ぞ。其にあの様にあることは、定てあのやうになふてはならぬ事体ありと見へたぞ。書を見るに、此心得第一ぞ。」と述べて、その師説を婉曲に斥けております。

近藤先生によると、綱齋の師説を嚴格に継承した筈の強齋が、こうした見解の相違を示した背景には、上述した『望楠所聞』が筆記されたと思われる享保十年から十一年に先立つ一定の期間において、彼が最も神道の修養に力を致したことによる思想深化が大きく影響しているとのこと。すなわち、享保八年に高宮を訪うて多賀社に詣で、高宮で『日本書紀』神代巻を講じ、また翌九年には闇齋の霊を祀る垂加霊社を多賀社祀官の邸内に勧請、同年春には門人山口春水の仲介で祇園社祀官の山本主馬より垂加以来の神書の附属を得、「守中」の霊社号を受け、『風水草』を写するなど、急速な勢いで神道を学んでいきます。さらに、望楠軒の名の由来ともなった楠公の「仮にも君を怨み奉るの心発らば、天照大神の御名を唱ふべし」という言葉を山本主馬から聞いたのもこの年です。こうした、神道修養の結果、強齋は、我が命が天照大神を根源とし、祖先から子孫に連なる生命の自

覚に至ったのであり、その思想的境地に拠る強齋の楠公観は、彼の学話を録した『乙巳録』において、「楠は唯々軍上手の武勇なものと云ふが、さうばかりでない。男たる者は、あそこの存念が望むところ。あの様に一点うらみなし君に向ひ切つた人は見ぬ。既に死にざまも、生きかはり死にかはり、朝敵高氏を亡ぼさんと」とあるのに示されています。すなわち、楠公が、弟正季と、「七生賊滅」を誓つて刺し違えたのも、「いまの世、人々すべて

高氏といつてよく、されば一高氏を滅ぼし得たとしても、それに続く高氏は、なほ次々に現はれることであり、これを滅すことは、我が一代の力をもつてすること不可能であれば、我れ先づ戦場に斃れて志を留め、後人の我が骸を乗り越えて後に続く諸高氏を打滅ぼしてもらひたい、といふものであつて、これ、我が一死をもつて後人の奮起を期せんとしたものであり、強齋のいふ「既二死ニザマモ生キカハリ死ニカハリ、朝敵高氏ヲ亡ボサント」は、そのことをいつたものに外ならない。」〔四続紹宇文稿〕ということなのです。周知の様に、楠公は、九州から東上する高氏の

大軍を平地を迎え撃つのは不利とし、朝廷に一旦、比叡山に遷御することを諫奏しました。しかし、一度出陣の君命が下るや、胸中一点君を怨み奉る心なく、従容湊川の死路に赴いたのでした。このとき楠公の心を貫いたものは、まさしく『拘幽操』が説く「真実君がい

として忍びられぬ至誠惻怛の本心」に他ならず、楠公は、天照大神の御名を唱えることによって、自らの生命の本源に回歸し、あえて君命に死することによって、生き変わり死に変わりして、賊を滅ぼそうとしたのです。この神道的境地に立つ楠公観への深化は、強齋が、闇齋と綱齋の義絶によって崎門と垂加に分裂した闇齋学を再び合一し、崎門の本流を「望楠学派」として確立する過程と相即するものと云えます。

以上、顔真卿から説き起こし、張巡を介して、崎門学における楠公論の展開を見て来ました。顔真卿や張巡が、主君の消息不明となつても孤忠を貫いたことは、「士は己を知る者のために死す」といったシナ式の忠義や、「御恩と奉公」の関係でなり立つ封建的な主従関係とは全くかけ離れたものです。また、君命に逆らう訳にはいかないと云つて、汝州に赴いた顔真卿の態度は、従容湊川に赴いた楠公の態度とも通じます。綱齋は、楠公を張巡の孤忠になぞらえることによって、従来の単なる優れた謀將、武士の鑑とする評価を脱却しましたが、いまだそれは宋学の影響下に止まるものでした。これに対して、強齋は、神道的修養を積み、生命の祖孫一貫一体の自覚に立つことによって、楠公の忠義をより蘊奥において理解し得たのであり、それは取りも直さず、我が国臣道の精華を発明すること他ありませんでした。

崎門列伝⑨ 鵜飼鍊齋 (当会顧問) 坪内隆彦

『大日本史』編纂を支えた古書探訪

崎門学派と水戸藩を繋いだのが、今回取り上げる鵜飼鍊齋(金平)である。栗山潜鋒を水戸に紹介したのも鍊齋である。鵜飼らの崎門学派は、水戸にその学問を伝え、国史の上に大義名分を明らかにした。平泉澄は、「是等の人々を通じて、崎門の精神と水戸学とは互に切磋し、砥礪し、相映発し、照応して、正しく国史を見、日本精神を闡明した」と書いている。

鍊齋は、慶安元(一六四八)年、鵜飼石齋の次男として生まれた。東条耕子蔵『先哲叢談後編 二』(国史研究会、大正五年)によると、鍊齋はわずか七、八歳で四書五経を誦し、十三歳の頃には、詩を賦し、文章を書くようになったという。十六歳の春に初めて『通鑑綱目』を読んでいる。後に彼は『通鑑綱目』など百十一巻を校訂訓読して刊行している。これは世に「金平点」として知られている。

『先哲叢談』の記述によると、鍊齋は二十歳の頃、山崎闇斎の門に入った。水戸藩に仕えるようになったのは、延宝六(一六七八)年のことである。彼を水戸に紹介したのは、佐々宗淳(十竹)だというのが定説だ。

佐々はもともと武門の生まれだが、十五歳の時に京都の妙心寺に入り僧となった。しか

し、やがて仏教を批判するようになり、延宝元(一六七三)年の頃『立志論』を作って還俗した。この歩みは、闇斎と共通する。佐々は延宝二(一六七四)年に水戸藩に仕官している。

名越時正は『水戸光圀とその餘光』において、「鍊齋との交友はこの仏教批判の反面で結ばれたか、もっと言えば鍊齋との切磋が還俗の意志を堅めさせたのではないかと私は推察する」と書いている。

佐々と鵜飼はともに手を携えて水戸光圀(義公)に仕えた。義公はすでに明歴三(一六五七)年に史局を開き、『大日本史』編纂のための史料収集に着手していた。その際、京都の親王家、公家に伝来する古記録・古文書が不可欠な史料だった。

本格的な古書の探訪書写は、延宝六(一六七八)年に佐々が上洛してから開始された。ただし、佐々が閲覧書写を許されたのは、日野・飛鳥井・阿野・中院等の諸家に止っていた。

この古書の探訪書写の対象拡大に力を注いだのが鍊齋であった。彼が上京し、佐々の活動に協力するようになると、探訪先地域が拡大し、京都では尊貴の家に及ぶようになった。その後、佐々は南都から河内・紀伊にまで足を伸ばした。このとき、上洛して佐々に同行したのが、内藤貞顕、吉弘元常らであった。内藤は、『大日本史』撰修の準備作業として進められていた『参考太平記』編纂事業を、

今井弘済の後を継いで完成させた人物である。一方、吉弘は『大日本史』編纂を主導した人物の一人であり、貞享五(一六八八)年には佐々とともに彰考館総裁に就いている。さらに佐々は、貞享一(一六八五)年に九州・山陽・北陸の数十力国を探訪している。これに同行したのが、丸山可澄(活堂)である。

丸山は佐々とともに史料探訪に尽力した人物で、義公の命により、諸家の花押を集録した『花押藪』の編纂にも当たった。

佐々が、広範な地域に向向いて史料収集に当たったのに対して、鍊齋は京都に集中して資料収集を展開した。彼は転法輪・西洞院・阿野・上冷泉・清閑寺・中院・油小路・大谷家等の諸公家、八条宮家及び大乗院・常修院・青蓮院等の門跡家等に何度か出入りし、古書の閲覧書写を進めた。

鍊齋は、貞享四年十月頃からは江戸の史館で紀伝の執筆に従事した。彼は、後宇多天皇(上)から後醍醐天皇に至る本紀と皇子皇女伝を担当した。鍊齋は彰考館の新館落成の賀宴で、

華館鼎新す修史の編
幽微を闡いて二十年を顕はす
公に至り参酌す百家の記
姦賊逃れ難し直筆の権

『文苑雜纂』三十二) という詩を作っている。

仲田昭一氏は、へ立派な彰考館ができました、そしてさらに修史の事業が、前進するで

ありましよう。このことが、二千年の日本の歴史の本質を明らかにすることであります。しかも、この事業は、義公の時に到りまして、多くの史料を探索して、事によって直書する、そういう姿勢であるのだと。このことによつて、「姦賊逃れ難し直筆の権」所謂人臣を是非する」と解説している。

義公と崎門学派の一致した志

― 尚仁親王への期待

近藤啓吾先生が指摘している通り、義公は延宝八(一六八〇)年、平安時代から江戸初期までの各種古典の序・跋・日記などを収録した『扶桑拾葉集』を、後西上皇と靈元天皇に献上している。そのとき水戸から上京した使者が鍊齋だった。

鍊齋は朝廷と一定の関係を築いていたと考えられる。そこで注目すべきは、八条宮家における鍊齋の活動である。鍊齋と八条宮家との交渉は、同家の家臣・葛野采女正、生嶋玄蕃頭を通じて行われた。

崎門派は、後西天皇の皇子で八条宮家を継がれた尚仁親王に対する期待を高め、鍊齋は、尚仁親王の御学友として栗山潜鋒を推薦している。

そして義公もまた、尚仁親王に特別な期待を抱いていた。名越は、義公が「恐らく鍊齋を通じて英邁なる親王の御志を知りその御学問をひそかに輔け奉ったものと思はれる」と指摘し、「光圀と崎門の俊秀が心を合せて親

王を輔佐し奉ったことは、光圀と崎門学者の志の一致を示す顕著な事実であらう。当時鍊斎は恩師闇斎の門にも出入したと考へられるから鍊斎が両者の掛け橋を務めたこともあり得よう」と書いている。

鍊斎は、義公のために八条宮家の『小右記』『西宮記』『猪隈閑日記』『春記』等を持借している。そして、義公は尚仁親王に常に書を贈るようになった。希望される書で水戸に蔵するものは浄書して献上した。貞享二（二六八五）年、義公は、宮家から古記録を借りたお礼に、所持していた古記録二部を写して、尚仁親王に献じていた。名越は、その二部が『台記』と『玉葉』であつた可能性を指摘している。

『台記』は、保元の乱直前まで二十年間にわたる、左大臣頼長の日記である。『玉葉』は承久の変前後三十年間にわたる九条道家の日記である。名越は「皇室の衰微、武士の専制を知らうとするには極めて重要なもの」だと指摘している。

そして、義公は尚仁親王に、関白九条兼実の日記『玉葉』を書写して献じようとしていた。『玉葉』の記事は、長寛二（一一六四）年から建仁三（一一一三）年まで、兼実十六歳から五十五歳までにわたる。多賀宗集は「記すところは、公・武の政治、摂関家の動向、朝儀をはじめ、世上の見聞、身辺の事情などきわめて多彩である。公・武政権対立の波瀾の時代の姿が、時代の立役者たる平清盛、源

義仲・義経・頼朝などの描写を通じてよくうかがわれ、公家文化の長い伝統と武家時代の新しい曙光とが交錯する世界を的確、明晰な叙述でとらえており、質・量において公家日記の白眉とされている」と評している。

一方、栗山潜鋒は元禄元（二六八八）年、『保平鋼史』を親王に献じていた。

ところが、翌年六月、親王は僅か十九歳の若さで薨去されてしまうのである。その五カ月前、義公は親王から由緒深い勅方の合香を賜り、感激して礼状を上つていた。

親王薨去の報に接した義公は「御所御事薨去の由、驚き存じ候、各御心体察し入り候、御悔みとして斯くの如くに候」と、家臣宛に弔状を送った。親王の薨去に直面して、義公が深く心を痛めたことは、『玉葉』の浄書が遅れ、御生前に献上できなかったことである。八年後の元禄十年十一月、八条宮家を嗣いだ文仁親王が元服して兵部卿に任ぜられた時、義公は『玉葉』を「季札の劍これを係くるに縁なし」として文仁親王に献じたのである。

「梅里先生碑」の建立

元禄三（一六九〇）年十月十四日、義公に對して幕府から隠居の許可があり、養嗣子の綱條が水戸藩主を継いだ。翌十五日、義公は権中納言に任じられた。そして彼は、元禄四年五月、久慈郡新宿村西山に建設された隠居所（西山荘）に隠棲した。

このとき、義公が力を注いだのが、己の半生を自ら筆に起こした自伝の文「梅里先生碑」の建立であつた。「梅里」は義公の号の一つで、崇敬していた呉太伯の住んでいた「常州無錫県梅里」に因んでいる。碑銘は漢文で二百九十九字。以下に読み下し文を掲げる。



拓原「梅里先生碑」

相し、歴任の衣冠魚帯を瘞め、載ち封じ載ち碑し、自ら題して梅里先生の墓と曰ふ。先生の霊は永く此に在り。嗚呼、骨肉は天命の終る所の処に委せ、水には則ち魚鼈に施し、山

「先生は常州水戸の産なり。其の伯は疾み、其の仲は夭す。先生、夙夜膝下に陪して戦戦兢兢たり。其の人と為りや、物に滞らず、事に著せず。神儒を尊んで神儒を駁し、仏老を崇めて仏老を排す。常に賓客を喜び、殆んど門に市す。暇あるごとに書を読めども、必ずしも解することを求めず。飲びて飲

には則ち禽獸に飽かしめん。何ぞ劉伶の罇を用ひんや。其の銘に曰く、月は瑞龍の雲に隠ると雖も、光は暫く西山の峯に留まる。碑を建て銘を勒する者は誰ぞ、源光圀、字は子龍。」

元禄四年六月、義公は碑銘の文を史館総裁の古弘元常に示して腹藏ない批判を求めたが、「儒仏の論だけはこのままにしてほしい」と述べていた。

「梅里先生墓」という題字は義公自ら揮毫した。そして碑銘の揮毫を命じられたのが、鍊斎であつた。村上元三氏の『水戸光圀 雲と月の巻』によると、鍊斎は西山の山荘の御用部屋に閉じこもって、数日を費やして揮毫を完成させた。こうして「梅里先生碑」は同年十月、瑞竜町にある水戸徳川家累代の墓所

に建立されたのである。



金平の墓（文京区・本駒込の龍光寺）

この間、鍊齋は佐々宗淳とともに義公の湊川建碑にも尽力した。鍊齋は元禄五年四月には、小納戸役に進み、第五代彰考館総裁に任命されている。だが、翌六年四月十一日、病のため四十六歳で病歿した。鍊齋亡き後は、三歳年少の弟・称齋と栗山潜鋒が修史上の重要な役割を果たしていく。

【活動報告】

一月二十八日、第一回保建大記勉強会開催
テキストは杉崎仁編注『保建大記打聞編注』を使用し、平泉澄先生の解説を読んだ。

一月三十一日、『崎門学報』第九号発行

二月二十五日、浦安で崎門研第二回保建大記の勉強会を開催した。当日は折本代表、坪内顧問をはじめ有志八人が参集した（一名スカイプによる参加）。前回は平泉澄の解説を中心に学んだため、本文としては実質今回が初めてとなる。

保建大記とは、江戸時代の崎門派栗山潜鋒が記した書で、保元から建久年間までの重要事を記したものである。この時代に源頼朝をはじめとした幕府政治が出現し、皇室の衰微してしまったことを、朝権回復を目指す観点から記したものだ。潜鋒は水戸に仕えたため崎門学と水戸学との交点ともいえる書である。テキストは杉崎仁編注『保建大記打聞編注』を使用した。『保建大記打聞』とは江戸時代の崎門派の谷秦山が栗山潜鋒『保建大記』を講義したのを記録したもので、それを水戸史学会理事である杉崎氏が編注したものである。第二回保建大記勉強会では、同書一ページから九ページまで輪読した。

内容としては、秦山の「日本の人にして道に志あるからは、日本の神道を主にすべし」という言葉から始まる。儒書の講究は神道を羽翼するものだという。こうした神儒兼学の態度は崎門学の大きな特徴といえる。秦山は今の儒者はまるで駄目だが、栗山潜鋒『保建大記』は素晴らしく、「是ほど珍重なことはない」という。頼朝、義満、信長みな「覇府」であるという認識を示し（江戸幕府を暗に批判している）、君臣がともに道を正すことが重要だとした。（小野）

三月二十八日、今上陛下の御譲位の問題に関し、承詔必謹の立場から、安倍首相宛の要望書を内閣府に提出した。要望書の全文は次頁に掲載する。

四月一日、浦安で崎門研第三回保建大記の

勉強会を開催した。当日は折本代表、坪内顧問をはじめ有志九人が参集した（一名スカイプによる参加）。前回に引き続き谷秦山の保建大記打聞（テキストは杉崎仁編注『保建大記打聞編注』を使用）を読み進めた。今回は、同書九ページから二十五ページまで輪読した。

内容としては、潜鋒は三種の神器がある方を以て正統としたが、三宅観瀾は道理の正しい方を正統とした。

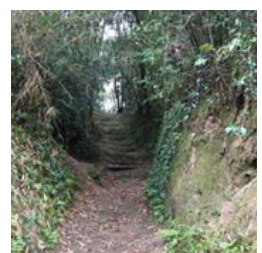
また我が皇室が開闢以来一系で替わらず、なおかつ代々君徳も涵養されてきたと賛美し、平清盛や源頼朝など臣下が不忠を働いた例だが、三種の神器に食指を伸ばさなかったのは良いことだと述べている。一方で中世以降綱紀が緩まり武家政権が代々続くことになってしまったのは悲しむべきことだとしている。そうやってしまった由来の一つに後白河帝が兄にもかかわらず弟の後を継ぐことになるなど長幼の道理に背いたことで保元、平治の乱を招いたことを指摘している。また、保建大記は八条親王にたてまつるための文章だったので、八条親王の英邁さを称える箇所もあった。（小野）

四月十一日、念願叶って鹿児島市石谷町にある、楠公社跡を参拝致しました。鹿児島中央駅からバスで四十分程離れた場所（南国交通バス「石谷小学校前」下車）にあります。この楠公社は石谷で民生の指導を任された勤皇志士の有馬新七先生が創建したものであ



行く参道を登った先に広がる景色は、往時の雰囲気を感じるに充分でありました（右写真）。（折本）

四月十二日、有馬新七先生所縁の地巡り敢行。午前中鹿児島市内を散策し、島津齊彬公を御祭神に祀る照国神社や、南州墓地、南州神社等をお参りした。午後はレンタカーで一時間程かけて移動し、宮之城にある楠木神社を参拝した。この楠木神社は、勤皇志士の有馬新七先生が石谷に建立した楠公社が元であり、湊川から薩摩に伝わったとされる楠公の木像を御神体として奉祀した。維新後、西郷



南州翁が鹿児島市内に創建した皇軍神社に遷座し、私学校が創設されるとその守護神になったが、明治十年、私学校における南州翁の側近で当時宮之城区長を務めていた辺見十郎太が有志と計って御神体の木像を宮之城に遷し奉祀したのが湊川神社であり、さらに昭和二十年現在の地に遷されて楠公神社となった。御神体の楠公木像は、一説によると湊川に楠公碑を建立した水戸光圀が同地の広厳寺に奉納した三体の楠公木像の一つが故あって薩摩伊集院に伝わったのを、有馬先生が石谷に奉祀したものとされる。

この様に薩摩と楠公の因縁は深く、楠公の尊皇精神が、西郷南州翁を始めとする薩摩志士に与えた思想的教化は計り知れない。残念ながら社内はかなり荒廃しており、現在も楠公の御神体をお祀りしているのか、鹿児島神社庁に問い合わせたところ、宮司が存在しないので確認できないとのことであった。同社の再興を祈念するばかりである。以上、大変有意義な鹿児島旅行であった。（折本）

五月六日、浦安で崎門研第四回保建大記の勉強会を開催した。当日は折本代表、坪内顧問をはじめ有志六人が参集した。前回に引き続き谷秦山の保建大記打聞（テキストは杉崎仁編注『保建大記打聞編注』を使用）を読み進めた。今回は、同書二十五ページから三十五ページまで輪読した。

内容としては、保元の乱で崇徳上皇、後白河天皇兄弟の争いがあり、平治の乱では藤原

信頼、源義朝が漁夫の利を得んとした。平清盛は私欲をむき出しにしたことで、安徳天皇が入水し給うあさましき世になった。その後頼朝が守護地頭を各地に配置し、王威が衰えることとなってしまった。

なぜこのような世になったかと言えば、一、兄である後白河天皇が弟の近衛天皇の後に即位し、しかも弟の養子となって即位するなど名分を損なったこと。

二、鳥羽上皇の妃待賢門院と白河法皇の密通によりできた子供が崇徳天皇であったこと。

三、それにより白河法皇の崩御後、鳥羽法皇は崇徳上皇を疎んじ、美福門院との御子である近衛天皇を即位させるなど美福門院の干渉を招いたこと。

四、後白河天皇は男色の寵童である藤原信頼を實力もないのに出世させたこと。

五、六条天皇の後に叔父である高倉天皇を即位させたこと。六条天皇は五歳、高倉天皇は八歳でどちらも元服前であったこと。

を挙げている。この時期は皇室がもつとも乱れが多かった時期ではあるが、八条親王に教育用に奉る文書という目的から、当時の皇室の問題点について厳しく指摘している。

今回で序章が終わり、全体的な内容はうかがい知ることができた。今後より各論を読み進めていくこととなる。

六月四日、浦安で崎門研第五回保建大記の勉強会を開催した。当日は折本代表をはじめ有志四人が参集した。前回に引き続き栗山潜

鋒「保建大記」を理解するため、谷秦山の「保建大記打聞」（テキストは杉崎仁編注『保建大記打聞編注』を使用）を読み進めた。今回は、同書三十七ページから五十三ページまで輪読した。前回までで序論が終わっているの

政が始まったが、万民を心服させるには至らなかったとしている。藤原氏の氏長者を巡って藤原忠通と藤原頼長の兄弟が争い始めたところに触れて今回の輪読は終了した。

七月二日、浦安で崎門研第六回保建大記の勉強会を開催した。当日は折本代表をはじめ有志五人が参集した。前回に引き続き栗山潜

鋒「保建大記」を理解するため、谷秦山の「保建大記打聞」（テキストは杉崎仁編注『保建大記打聞編注』を使用）を読み進めた。今回は、同書五十五ページから六十五ページまで輪読した。前回までで序論が終わっているの

で、今回から前回までの内容をより詳しく論じる形となる。

内容としては、鳥羽上皇は崇徳天皇を疎んじられ、弟である近衛天皇に譲位するようお命じになった。崇徳天皇はせめて自らの養子とし、皇太子にしてから譲位することを望んだが、それすら鳥羽上皇に拒絶された。近衛天皇が若くして崩御されたのちは、崇徳上皇は自分が重祚するか自分の皇子である重仁親王が皇位に就くべきとお考えになったが、鳥羽法皇は近衛天皇の兄である雅仁親王（後白河天皇）が就くことに決めた。また、後白河天皇の皇太子は、重仁親王ではなく、後白河天皇の皇子であり、母を失ったため鳥羽法皇と美福門院によつて育てられていた守仁親王（後の二条天皇）が就くこととなった。関白藤原忠通もそれをお諫めするどころか追従した。栗山潜鋒はこれらのことを嘆かわしいこととしている。天下は乱れ「トリ物（取り合

うもの）」になってしまい、武家に奪われるきつかけになったと厳しく批判し、誰が見ても涙を流すことだと嘆いている。また、前述の通り、皇室だけでなく当時の摂関家にも、皇室を支える役割を忘れたと辛辣である。後三条天皇の親政を継いで白河鳥羽両上皇の院

皇側の小競り合いがあったことに触れて、潜鋒の議論は尊皇の在り様に移る。わが国はシナとは違いどちらも天日嗣による争いであるが、その場合臣下としてどちらをお支えすればよいのであろうか。それは三種の神器を擁する天皇方であるという。後鳥羽天皇や南北朝の際の北朝の天皇など、三種の神器を擁しない帝には問題があるという。特にそれをお諫めしなかった当時の摂関家をはじめとした群臣は罪が重いとしている。また、本日の輪読箇所では谷秦山による難解ではあるが詳細な神器論が展開されている。

今上陛下の御譲位の件に関する要望書

昨今における今上陛下の御譲位の問題に関して、安倍内閣は一代限りでの譲位を認める特例法を制定する方針を固めた。しかしこの政府方針は、二つの重大な問題を内包している。

第一に、陛下は御譲位について一代限りではなく、恒久的な制度化を思召されているということだ。陛下による昨年八月八日の「おことば」を素直に拝聴すれば、それが将来の天皇を含む「象徴天皇」一般の在り方について述べられたものであることは明らかである。第二に、譲位を一代限りで認める特例法は、現行憲法第二条で、皇位は「国会の議決した皇室典範の定めるところによる」とし、さらにその皇室典範の第四条で、皇嗣の即位は「天皇の崩御」によるとする規定に違反する。

本来、我が国の皇位は「天壤無窮の神勅」に基づき、現行憲法が規定するような「主権者たる国民の総意」に基づくものではない。したがって、皇室典範は憲法や国会に従属するものではなく、皇位継承の決定権も、一人上御一人に存する筈である。しかしながら、その上御一人であらせられる陛下が、現行憲法の遵守を思召されている以上は、この度の御譲位も憲法の規定に従う他なく、それに違反する政府方針は御叡慮を蔑ろにするものといわざるを得ない。

もつとも政府は、衆参両院における与野党協議の結果、皇室典範に附則を置き、そこで特例法と典範は一体であることを明記することで憲法違反の疑義を払拭し、典範改正による譲位の恒久的制度化を主張する野党との政治的妥協を図ったが、肝心なのは、与野党間の政治的合意よりも、御譲位における最終的な当事者であらせられる陛下が、その特例法案を御嘉納あらせられるかという事である。

安倍首相以下、我々国民の義務は承認必謹、ただ陛下の御主意に沿い奉り、御宸襟を安んじ奉ることのみに存するのであって、一度発せられた陛下のお言葉を歪曲する様な行為は絶対に慎まねばならない。特に、この度における御譲位の思召しは、陛下が将来の天皇のあるべき姿について、長年、熟慮に熟慮を重ねられた上で、御聖断遊ばされたことであり、首相以下我々国民の側にいかに合理的な理由があるといえども、臣下の分際で反対する資格はない。

ところが、先の「おことば」以来、この度の御譲位の問題に対する安倍内閣の態度は、陛下の御主意に沿い奉る誠意に欠け、はなから特例法ありきでの対応に終始したことは御叡慮を蔑ろにするものと言わざるを得ない。甚だしきは、首相が人選した「有識者会議」の出席者の中から公然と譲位に反対する意見まで噴出したことは極めて遺憾である。異論があるなら、前もって陛下に諫奏申し上げるのが筋であり、後から反対するのは不敬千万、皇威を失墜させ後世に禍根を残す所業

である。「有識者会議」は首相の私的諮問機関といえども、安倍首相の政治責任は免れない。

特に、陛下が最初に御譲位の思召しを漏らされたのは平成二十二年に遡るとされ、当然その御内意は歴代の内閣にも伝達されたにも関わらず、政府は聖明を蔽ひ隠して来た。その責任を棚に上げて、「おことば」という、非常の措置で下された御聖断に盾突くなど言語道断である。

なお、「有識者会議」での議論を踏まえた「論点整理」では、譲位が将来の全ての天皇を対象とする場合の課題として、「恒久的な退位制度が必要とする退位の一般的・抽象的な要件が、時の権力による恣意的な判断を正当化する根拠に使われる」ことが挙げられているが、「時の権力による恣意的な判断」は、譲位が今上陛下のみを対象とする場合に、「後代に通じる退位の基準や要件を明示しない」ことによっても引き起こされるのである。

このように、譲位を一代限りとするか、恒久的制度とするかという当面の問題は、賛否両論に一長一短あり、結論を一決しがたいのであり、だからこそ我々首相以下の国民は、こうした国論を二分しかねない問題については、最終的当事者であらせられる陛下の御聖断を仰ぐほかないのである。したがって、政府は、この度の御譲位に関する特例法案が与野党の政治的妥結を得たとしても、同法案を国会に提出する前に閣下に上奏し、御裁可を仰ぐべきである。

かつて孝明天皇は、御叡慮に反して通商条約に調印した徳川幕府に御震怒遊ばされ、諸藩に下された密勅の中で、幕府による「違勅不信」の罪を咎められた。これにより朝幕間の齟齬軋轢が天下に露呈したことで、幕府権力の正当性は失墜し、尊皇倒幕の気運が激成して、幕府崩壊の端を開いたのである。このように、我が国における政府権力の正当性は、天皇陛下の御信任に基づくのであって、それは「国民主権原則」や「象徴天皇制」に基づく現行の政府権力においてすら例外ではないということこそを安倍首相はゆめゆめ忘れてはならない。

以上の趣意により、安倍首相及び政府は、君臣の分を弁え、これまでの御叡慮を蔑ろにした態度を猛省すると共に、一切の予断を排して承認必謹し、以て一刻も早く御宸襟を安んじ奉るべきである。右強く要望する。

平成二十九年三月二十八日

内閣総理大臣安倍晋三殿

安倍首相に承認必謹を求める有志一同

代表 折本龍則

坪内隆彦

三浦颯

賛同者 西村眞悟

四宮正貴

小野耕資

三浦夏南

柳毅一郎

赤穂藩浅野氏の家臣・ 藤井又左衛門宗茂と富山 (当会顧問) 坪内隆彦

朝権回復を目指して桃園天皇側近に講義をした竹内式部が京都から追放された宝暦事件(一七五八年)に連座し、さらに明和事件(一七六七年)で、山県大弼とともに処刑された藤井右門は、享保五(一七二〇)年、射水郡小杉町(現富山県射水市小杉町)で生まれた。彼の父・藤井又左衛門宗茂は、もとと赤穂藩浅野氏の上席家老だった。

右門が生まれるおよそ二十年前の元禄十四(一七〇一)年三月十四日、赤穂藩藩主浅野長矩は、殿中松の廊下において、徳川幕府の儀式・典礼を司る高家の筆頭「高家肝煎」の吉良上野介義央を切りつける事件を起こした。將軍徳川綱吉は激怒し、幕府は長矩に即日切腹を言いつけ、長矩が藩主を務める浅野家は改易、赤穂城も幕府に明け渡すよう命じた。長矩の恥辱をそぐため、大石良雄ら四十六士は元禄十五年十二月十四日、吉良を討った。

藤井又左衛門宗茂はこの義挙に加わることなく、結局射水郡に移ったことから、一部の批判にさらされてきた。ところが、宗茂は長矩の弟・浅野長広(大学)による浅野家復興を模索していたのである。

長広は寛文十(一六七〇)年に生まれ、元

禄七(一六九四)年八月、長矩から赤穂郡の新田三千石を分与されて旗本の寄合に列し、幕府から木挽町に屋敷を与えられている。同時に長矩の養子となり、同年九月一日には、初めて將軍綱吉に拝謁している。しかし、刃傷事件後、長広は閉門となり、三千石の所領も召し上げられた。長広は、元禄十五年七月十八日に閉門を解除されたが、広島浅野宗家にお預けとされた。ここに赤穂浅野家の再興は絶望となった。

では、この間、宗茂はいかなる状況にあったのか。佐藤種治の『勤王家藤井右門』には、次のように書かれている。

「藤井又左衛門は富山地方(越中)の記録によると、大学に随従して富山へも来たといふ伝説もあるから、彼は長広の信任があつたらしい。それであるから、今將軍の激怒してゐる最中に長矩の遺骸受取や、泉岳寺葬送に狂奔する暇が無く、大学殿を御取立に成らせたい考へから、或る方面からの注意で幕府に対する遠慮か、然らざれば幕府当局に対する交渉其他で、繁忙を極めて会葬の機を逸したのであつて、亡君に対しては人知れず枕を常にぬらしてゐたことであらう」

福島瑞岳はさらに明確に書いている。

「藤井又左衛門宗茂は、迅速清済に処理をして直に大学長広をして浅野家復興の猛運動に昼夜心血をそゝいたのであつた。それが為めに大石始め同士の間に意志の疏通を欠き、のみならず感情問題にまで及んだ為、仇討の

壮挙に加盟せられなかつたことは、千秋の恨とする所である。

又左衛門は、大学長広をして、浅野家継承復興せんものと、綱吉將軍激怒してゐる最中総ての室氣を顧みず、各方面に運動を開始した。又左衛門は事件の翌年秘策をめぐらして閉門中の大学長広に同伴して緑りの深い越中の前田公を尋ね、擁立の援助を受けたが悲しくも画餅と歸した。一方赤穂の同士より反感を受ける。再興運動には失敗をする。人生不如意を痛感し、名譽も地位も放棄し、一野人の生活で一生を終らうと決心したのも無理からぬことであらう」(日珠上人と藤井右門先生)

見るべき点は、宗茂の忠の在り方である。佐藤種治は、「彼をして若し国詰家老であつたならば、無論大石の如き回天動地の働きはできぬが彼の指揮配下に屬して、禄千石の奥野將監等と同様な行動に出たこと、思ふのである。彼最初から大石とは全く境遇の異なる別行動をとつたのであつて、近藤源八や岡林奎之助の如く寢返したのでもなく」、大野九郎兵衛のような不忠者ではないと説いた。一方、福島瑞岳は「又左衛門には大石良雄の如き智謀秘策もなく唯主家を復興し亡君に報ゆる忠正一点張りの典型的武人であつた」と主張している。

宗茂は富山潜行中、富山藩第二代藩主前田正甫から輔仕を薦められたが、臣節を守り、辞退している。そして宗茂は、長広の広

島浅野宗家へのお預けという事態を見届けた上で、知己となった津幡江村(現射水市津幡江)の若林源吾宅助のもとに寄寓した。そして、源吾宅助の縁戚である小杉町の豪農金森文右衛門の求めに応じて、手代を勤めることになったのである。宗茂は彼なりの忠節を貫こうとしたのである。

そして、宗茂は小杉近隣の大手崎村豪農・赤井屋九郎平の娘と結婚し、一女二男に恵まれた。その長男が右門である。右門は、金森に指導によつて日夜経書の勉強に励んだ。だが、宗茂は右門が十四歳の時に亡くなっている。では、右門は父から何を受け継いだのであろうか。

佐藤種治は「(宗茂の)高潔典雅の性質は、其子右門直明の血管に自然に流れて、私利私慾を度外視し、正義正道で固つた振天動地の大活躍をなしたのであらう」と述べている。そして、福島瑞岳は「皇室の式微を慨嘆し、勤王主義を以て一生を通貫したる(右門の)忠正は、嚴父又左衛門の思想を其儘に遺伝された」と書いている。さらに、『藤井右門直明先生略伝』には、「やがて己は将来大丈夫となり天晴れ君国の為に一身を抛つて万乗の君に對し忠義を尽さねばならぬと幼な心にも皇室の式微を慷慨して発憤したのであつた」と書かれている。

宗茂自身、義挙に加われなかつたことを生涯嘆き続けていたであらう。しかも、義挙の賛否をめぐる大きな論争が巻き起こってい

た。右門は「忠臣としての出处進退」という重い課題について、早い時期から考える機会を得たに違いない。これこそが、「勤皇家・藤井右門」誕生を支える強力な基盤となったのではなからうか。

【書評】坪内隆彦著

『GHQが恐れた崎門学』（展転社）

歴史を動かす原動力とは

マルクスの思想がレーニンのロシア革命を生み、北一輝の思想が二・二六事件の青年将校を動かした様に、或る特定の思想が思いがけない原動力となる例はそう多くはない。歴史とは様々な偶然が重なりあつて、予期せぬ方向に発展するのが常だからだ。しかしながら、七百年もの武家政治を終わらせた明治維新の原動力とは何であつたか。それは黒船来港の外圧の結果や関ヶ原の西軍勢力の巻き返しのみで説明しうるものなのか。そうした中、本書では、幕末の志士たちの「自らの思想と行動を支える教科書」、「聖典」として、浅見綱齋の『靖献遺言』をはじめとする五冊の書物を取り上げている。一見何の脈絡もないこれらの書物の点と線とを結ぶ接点は何であつたか。それが「明治維新を導いた國體思想」としての「崎門学」である。

「崎門学」とは、垂加神道の提唱者として知られる山崎闇齋の門流から発展した思想である。「君臣の大義と内外（自国と他国）の別」

を強調した闇齋は、江戸幕府初期にあつて既に天皇親政の理想を掲げていたというのだ。つまり明治維新よりも百年以上も昔に、「朝権回復」を目指したのが、崎門学派だったことになる。

例えば安政の大獄で命を落とした梅田雲浜、宝暦事件で朝廷を倒幕に導こうとしたとされる竹内式部、楠公精神を継いで討幕に向かった真木和泉、それらの思想背景には、大義のために命をもともしなかった中国の烈士たちを描いた『靖献遺言』の思想があつた。また吉田松陰を討幕派に導いたものこそ、明和事件で処刑された山県大弼の『柳子新論』に他ならない。その志は高山彦九郎を経て、昭和維新の権藤成卿にまで引き継がれている。そして歴代天皇の山陵修補を提言した『山陵志』。その源流は、朝権衰退を憂えた栗山潜鋒の『保建大記』にあつた。蒲生君平の遺志は、水戸学と合流し、藤田東湖の国体思想へと発展する。さらには、徳川氏を賛美したとされる頼山陽の『日本外史』の底流にも幕政批判があり、頼家三代における崎門学派との交流があつたことを忘れない。

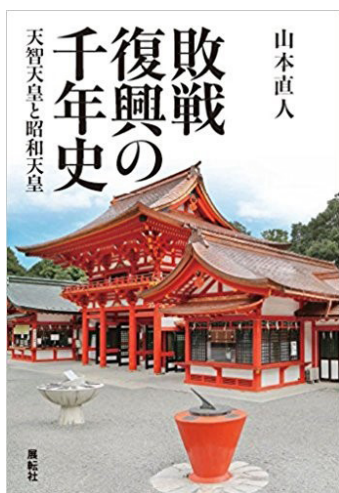
平成三十年で明治維新百五十年を迎えるが、「明治」といえば文明開化以降の日本における近代化の出発点と見做されがちである。それどころか『明治維新という過ち』という書物にも象徴される様に、未曾有の国難を乗り越えた先哲たちを過剰な表現で貶める現象までが生じ始めている。「尊王攘夷」や「王

政復古」の思想の源流については、これまで国学や水戸学といった近世思想が注目されてきた。しかしながら、崎門学とは何か、初学者向けに解説した本は皆無だったといつていい。「明治」とはいかなる時代であつたのか、さらに踏み込んで「維新」の源流はどこに見出せるのか。本書はその解明に一つの手がかりを示してくれるだろう。（山本直人、『表現者』平成二十九年七月号）

【新著紹介】山本直人著

『敗戦復興の千年史』（展転社）

山本直人



白村江戦と大東亜戦争の交錯

昭和二十一年八月十四日、昭和天皇は首相、閣僚が出席したお茶会で、「（白村江の敗戦の後に）天智天皇がおとりになった国内整備の経緯を、文化国家建設の方策として偲びたい」と仰せられたという。大東亜戦争の敗戦という事態に直面したとき、昭和天皇が思い起したのは白村江の敗戦に向き合った天智天皇のお姿であつた。わが国の悠久の国史におい

てただ二回だけの敗戦であり、どちらも皇室の存続の危機でもあつた中で微妙なかじ取りを迫られた時期であつた。

この両時期とも日本は外来の律令制度や「民主」制度をひたすら導入することに努めた時代であつた。後の時代から見れば、そのように外来の文化を際限なく受け入れて、日本は大丈夫かと思わず考えてしまうような状況であつた。しかしそれはひとまず勝者の文明を受け入れたうえで、長い年月をかけて押し返そうという決意でもあつた。そうした千年先を見据えた計によって、日本の存続はなされたのである。

本書でも紹介されている通り、米内光政が昭和天皇に「敗戦の結果、日本の復興は五十年はかかりましよう。何とも申し訳ないことではありますが、何卒、御諒承をお願いいたします」と申し上げたとき、昭和天皇は「恐らく三百年はかかるであろう」と仰せられた。単純に物質的側面だけを眺めれば、三百年はおろか米内の言つた五十年よりも早く、戦後日本は戦前以上の経済水準を手に入れることができた。しかし精神の面はどうであろうか。崎門学に代表される、日本本来の國體に立ち返ろうという精神は、未だに敗戦以来眠り続けている。われわれやわれわれの敬愛する諸先輩が長年熱い叫びをあげているにもかかわらず、維新への道は見えていない。しかし山崎闇齋の時代から明治維新までも、約二百年の歳月を必要としている。われわれは一步で

も前に進める努力を怠つてはならないが、一方で数年で成し遂げられるような軽い使命ではないことも自覚すべきであろう。その際に参考となるのが、白村江の敗戦なのである。

白村江の敗戦と昭和の敗戦。両時代を往復しながら「千年史」を考察する一冊である。

(小野耕資)

明治以降における忠臣蔵

— 福本日南と浅野長麿が

掘り起こした忠臣義士の物語 —

小野耕資

『忠臣蔵』のはじまり

年末には毎年のようにテレビドラマになっている「忠臣蔵」。言わずもがなであるが、江戸時代起きた赤穂事件を題材とした物語である。吉良上野介に切りかかったことに因り切腹させられた浅野内匠頭の仇を討つため、大石内蔵助らが決起し、吉良を打ち取り、大石らも切腹となる話である。

当時から学者の間でも、大石内蔵助の行動を是とするか非とするかで意見が分かれていた。もっとも強い肯定論の一つに、崎門の浅見綱斎のものがある。綱斎は、「喧嘩両成敗の法を適用すべきなのに、吉良におとがめがないのは不公平で、浅野は吉良に殺されたも同然である。大石らが浅野家の家臣として主君の恨みを晴らそうとしたのは当然で、吉良

を打たなければ大義はいつまで経っても実現しない」と主張していた。

市井にあつても赤穂事件は大きな話題を呼んだ。事件が起こった翌年から歌舞伎等の演目に取り入れられるほどの人気であつた。

しかし、実は江戸時代の歌舞伎や人形浄瑠璃等の演目では、幕府の弾圧を逃れるために室町時代の話であると偽装するなど、さまざまな潤色を加えざるを得なかった部分が多かつた。「大石内蔵助」は「大星由良助」となるなど、登場人物の名前も変えられていた。

明治期の忠臣蔵ブームの火付け役、福本日南

現代のような史実に近い形での物語となつた忠臣蔵のブームは、実は明治時代から始まつている。そのブームを作つた人物の一人が、福本日南である。福本は福岡県出身。陸羯南と新聞『日本』を興した人物の一人で、三宅雪嶺などと並んで陸が不在、体調不良の時等に社説を担当できる人物の一人であつた。陸の病氣、死により『日本』の経営者が変わると、旧『日本』系の同人は一斉に同紙を離れることになった。多くは三宅雪嶺とともに『日本人』に合流、『日本及日本人』と改題することになるのだが、福本は地元九州日報に行くことになる。この九州日報は玄洋社系の新聞で、古島一雄（のちに犬養毅の秘書となる）など『日本』関係者との縁も深い新聞である。この九州日報に連載されたのが、『元禄快拳録』であつた。『元禄快拳録』

は日露戦争後の武士道礼賛の空気に乗つて大いに注目され、忠臣蔵が日本社会に根付くことになったのである。『元禄快拳録』は現在岩波文庫化もされている。

福本日南の思想的背景

ところで明治期の忠臣蔵ブームの火付け役である福本日南は、崎門をはじめとした國體思想と因縁浅からぬ人物であつた。福本日南の父泰風は平田鏡胤の門人であり、平野国臣とも関係が深い人物であつた。日南自身は明治七年に上京した折に、岡千仞、丸山作樂、小出繁、小河一敏、副島種臣、谷干城らに学んだ。長崎時代に学んだ谷口藍田は西依成斎に通じる崎門の門流であるし、谷干城は崎門の谷秦山の子孫である。

日南の盟友に同じく崎門の流れをくむ菅沼貞風がいる。日南の南洋への関心は貞風との交流の中から生まれたのである（坪内隆彦『維新と興亜に駆けた日本人』「福本日南」参照）。



福本日南

福本日南『元禄快拳録』の内容

『元禄快拳録』はその題からもうかがい知れる通り、赤穂浪士が主君の仇を討つために

立ち上がった行為を義拳とたたえるものである。それは書き出しの「赤穂浪人四十七士が復讐の一手は、日本武士道の花である。」（岩波文庫版上巻15頁）という一節からもうかがい知ることができる。だが一読してすぐ気づくことは、福本は義拳礼賛の信条を頭にしつつも、極めて冷静かつ正確に史実を記録し、伝えようとする立場を崩していないということである。現代史学の目からすれば間違ひもあるようだが、俗論も多かつた赤穂事件の真相を伝える書物として、現代でもその意義は薄れていない。福本は明治時代の文明開化の軽薄な風潮に対抗して、忠臣義士の物語を描き出したと推測されるが、それは露骨な形では前面に出されていない。

『元禄快拳録』の筋は現代人には半ば常識化した「忠臣蔵」の物語なのでいちいち紹介していくことはしないが、読んでいてわたしの心に留まつた部分をいくつか触れていこうと思う。

一つ目は、赤穂浪士の決起に際し、山鹿素行の思想的影響を重視している点である。実際大石内蔵助は山鹿の門弟だったわけだが、山鹿とのかかわりや山鹿自身の思想の紹介に多くの頁を割いているのは印象深い。

二つ目は吉良上野介を守るために戦つて戦死した家来に対しても称賛を惜しんでいないということである。「吉良家名譽の士とも言ふべきである」（下巻一三八頁）と短いながらも最大級の賛辞を送っている。一方で吉良

上野介を見捨てて逃げた人間への評価は辛辣で、「卑怯を極めた」（下巻一三九頁）と罵っている。

儒学的教養を基に書かれた書物は、自らの心魂をいかに作るか、いかに腹を決めるかという観点が自然に表れることが多い。本書もその例外ではない。印象的な一説をご紹介します。

「天下の危険は、山にもあらざれば、川にもあらず。実に人情反覆の間にある。昨日までは肩を並べ、席を列ね、いづれ劣らぬ忠勤の士と見えた赤穂の藩臣らも、主家の断絶に会って、魂魄を失い、会議のたびごとに、十人減り、二十人減り、寔に頼み渺ない有様を現出した。しかしながら志士は溝壑に転ずることを忘れず、勇士はその元を喪うことを忘れぬ。真の志士、真の勇士は、国家播蕩の際において^{あらわ}見える」（上巻二二九頁）

「ここに至つて自分は長嘆してやむ能わざるものがある。彼八人の逃脱連といえども、ここに至るまでには、他の尊敬すべき忠義の諸士と異ならざる幾多の辛酸を嘗めてきたに相違ない。殊に毛利小平太のごときは、一挙の前日まで、衆と労苦を分かち來たのである。而うしていざ討ち入りという場合に臨み、その節を失うたので、ついに永く不忠不義の人となった。けだし彼らはこれによって五年か十年か生き延びたであろう。しかしながらこれがために永く歴史上に光輝ある生命を喪い、しかのみならずその五年か十年の残生の

憂苦、懊惱、悔恨、慚愧のうちに悶え、この世からして焦熱地獄の底に陥つた。『元禄快拳録』を読んで、士の最も留意すべきところは、実にこれらの辺にある」（中巻三〇七頁）

国粋主義の日本文化への貢献

福本日南の『元禄快拳録』は忠臣蔵を掘り起こすことになったわけだが、明治時代の国粋主義者たちがこうした歴史や日本文化の掘り起こしに大きく貢献した例は多い。富士山を「日本の山」と称えた志賀重昂、日本美術の岡倉天心などが有名どころである。福本日南の「忠臣蔵」もその一つとして数えることができる。国家は「想像の共同体」であるという議論がある。だが国家を標準語やマスコミの力で無から生み出されたかのようにみなすのは誤りである。特に日本のような歴史の長い国家の場合はそうである。国家はある日突然人工的に模造されたものではない。前近代の大きな遺産と準備過程を経て成立したものである。そこに西洋近代の影響は否定できないだろう。だが同時に日本の伝統を踏まえ、移行していくことにこだわったのもまた明治時代の特徴である。西洋近代に倣わなければ生き残っていけなかった時代にあつて、いかに日本の伝統を残しながら生き残っていくか暗中模索した時代でもあつた。

中央義士会と浅野長勲

話を忠臣蔵に戻す。福本日南の『元禄快拳

録』によつて、忠臣蔵は一大ムーブメントとなった。日南が明治四十一年に興した義士会は、明治四十五年には「中央義士会」となる。その初代総裁となったのが、広島藩の最後の藩主であつた浅野長勲^{ながしん}である。

浅野長勲の先祖である浅野長政の妻は、豊臣秀吉の妻おねと姉妹であり、大きな勢力を持つていたが、徳川時代には一地方藩となつた。浅野家は、何回かの国替えの後、広島藩を治めることになる。これが浅野本家である。分家が赤穂藩を治めており、ここから浅野長矩（内匠頭）が出ることとなる。

幕末、芸州広島藩は長勲とその先代である長訓により急速に勤皇に傾いた。慶応三年には大政奉還の建白書を土佐藩、長州藩と共に幕府に提出。その後、王政復古の大号令で議定となり、小御所会議にも出席している。孝明天皇からのご信任も厚かつたと言われる。廃藩置県後はイタリア公使なども務めた。イタリアでは、統一の過程でイタリア国王を王位につけるべく戦つたガリバルディーに関心をもち、「まるで西郷隆盛のようだ」と思ったという。余談ながら、三宅雪嶺に「西郷隆盛とガリバルディー」という文章がある。ひょつとしたらこの時の浅野長勲の感想に着想を得たのかもしれない。

その後帰国した長勲は、谷干城、陸羯南らと会談。既に陸が始めていた『東京電報』を改題し、強化する方針で一致した。こうして浅野や谷、杉浦重剛らが出資者、陸が社長と

なり新聞『日本』が創刊された。『日本』は国民主義を謳う硬派な新聞で、三宅雪嶺らの『日本人』とともに論陣を張つた。彼らの主張は俗に「国粋主義」と呼ばれ、欧化主義に對抗して日本人のナショナリティ（国粋）の顕彰を訴えた。この『日本』に参加していたのが福本日南である。ここで福本日南と浅野長勲の繋がりが生まれた。その後両者が中央義士会で忠臣蔵の顕彰を行ったことは前記の通りである。

時代は下り昭和十一年七月十三日、当時九十五歳の浅野は泉岳寺で次の和歌を詠み、ルーミアアの駐日公使も務めたバグレスコ少将に渡している。

後の世の鑑^{かがみ}なりけり 曇りなく 磨き鍛へし 武士^{もののふ}の道

浅野は赤穂義士に日本人が手本とすべき武士道を見ていた。バグレスコ少将はこのことにいたく感動したのか、後に『大和魂』という小説を著している。それは忠臣蔵をめぐる歴史小説で、日本語版の他に英語版、フランス語版も出版されたという（ただし日本語版は「浅野長勲」が「浅野長親」と誤記されている）。赤穂義士の顕彰に生きた浅野は、この翌年九十六歳で生涯を終える。まさに武士道の復活に捧げた人生であつた。

その後の『忠臣蔵』

福本日南らが火付け役となつて一躍国民的物語となつた忠臣蔵は、大正、戦中期におい

ても愛好された。ところが、敗戦後、GHQは仇討ちや封建的忠誠心および生命の軽視を好ましいこと、名譽なこととした映画等の作成を禁止した。これにより忠臣蔵は上演できなくなった。GHQは、日本人が原爆や空襲、敗戦の「仇討ち」を果たそうと考えることを恐れたのであろう。

サンフランシスコ講和条約以降は再び忠臣蔵が人気となった。特に好評を得たものに、NHK大河ドラマの「赤穂浪士」があった。これは大佛次郎が原作である。大佛次郎の原作は戦前に書かれたものであったが、福本日南以来の「赤穂義士」という名称は「赤穂浪士」に置き換えられ、「武士道の物語」から「反逆のドラマ」に置き換えられた点に大きな特徴があった（新潮文庫版解説）。また、史料が少ない時代においてすらも、日南が山鹿素行などの國體思想との関わりを指摘していたにもかかわらず、現代ではそのことはほとんど顧みられなくなっている。

大佛次郎が特別だったのではなく、既に大正時代から忠臣蔵の「忠臣義士」観は薄らいでいた。改めて忠臣蔵は明治時代の原点に立ち返り、「忠臣義士の物語」として位置づけられなければならない。

※次号では、浅見綱齋の『四十六士論』をもとに、崎門学の赤穂義士観について論じたいと思います。（折本）

【書評】山口翔著『永遠の忠臣蔵』

忠臣蔵に込められた本当のメッセージとは何か。本書はそれを、赤穂浪士の口上書と、山鹿素行の影響から読み解いていく。

内匠頭や大石内蔵助は山鹿素行から國體思想の薫陶を受けていた。一方吉良は高家筆頭として幕府の威を借り朝廷に干渉することがあった。その吉良に高額の助役を内匠頭は命じられていた。民生を重んじる浅野家にとってそれは受け入れられないものであった。著者はそれが「松の廊下」の原因とみる。一方大石は、浅野家再興の道を残しつつ、吉良への主君の思いを成就する意味から起こしたのが、討入りであったとする。内蔵助は自らの拳を討入りではなく「喧嘩」と捉えていた。それは幕政批判であると受け取られずに主君の思いを果たすべく内蔵助が考えた弁法であった。即ち、忠臣蔵を考える上では、そこに影響を与えた山鹿素行への言及なくして論じることはいかならないとしている。



若林強齋先生・ 大学講義を拝読して

三浦夏南

本稿では、若林強齋先生の大学講義を拝読し、学び得たところを率直に記して行きたいと思う。先生の大学講義は大学の序文を講義した大学序講義、経文を講義した経文講義、伝文を講義した伝文講義、大学或問を講義した大学或問講義に分かれている。本稿では、孔子が残したとされる大学の経文の講義を見て行きたいと思う。

まず初めに先生は

「さて、学と言えは、結構なことじゃと言うことは誰知らぬ人もないようなが、また実に学と言うことを知った人はないぞ。（中略）学ぶ身からは学ぶわけをとくと見定めたいものだ。」

と言っておられる。学問が素晴らしいものであるということは誰でも知っているが、本当の意味で学問とは何かということを知っているものは世に少ない。学とは何なのかを明確にし、なぜ学問をするのか、学ぶ理由を見定めなければならない。

「必至と直な君臣、直な父子にならねばならぬことで、それが別して奇特なことでは

も殊勝なことでもない。さしあたり、にじりもすじりもならぬ当然のことで、すなわちこれを学と言うぞ。」

人間は人の間と書くように、人と人との繋がりの中に生きている。具体的人間関係の内に神より与えられた人の道があり、その具体的関係の中に徳も生きている。神に連なるいのちの繋がりは儒教においては五倫として示される。すなわち、君臣、父子、夫婦、長幼、朋友の五つの人間関係である。この内、最も重しとされるものが、君臣、父子の道である。神のいのちは大君に流れ入り、大君のいのちは臣下の祖先へ、祖先のいのちは父に繋がれて、母とのむすびのさきはえとして我々のいのちがある。この縦に連なるいのちを礼拝するところにあらゆる人間関係を支える柱が生じる。この忠孝仁義の道こそ、人間が最も大切にすべきものである。この君臣が本来本法の君臣、父子が本来本法の父子にならねばならず、これは特別なことでも高尚なことでもない。人と生まれては当然のことであって、当たり前のことを当たり前にすることが学なのである。高尚、高遠なものに流れて、五倫を滅却するものを戒める先生の有難い教えである。いかなる学問をしようとも、忠孝の道を外れぬこと、先生のお言葉により、学問の筋目が見えてくる。

「暇がないの、不器用なの、貧窮なの、年が寄つたのと品々の言い訳があるが、口には食わねばならぬ、身には着ねばならぬという当然には忙しいによって着るもの着ぬの、貧しいによって飯食わぬのと言う人は昔から一人もないぞ。されば衣服飲食はまだ外物じやが学は人の人たるようになることではないか。衣服の類ではない。切にせではかなわぬことで、せでかなわぬと言うもまた浮いた言葉、必至とさしずめのことぞ。」

学問は良いことであるということは皆知っているが、それを実行に移さないのである。皆暇がない、不器用である、お金がない、年を取つたと様々に言い訳をするが、忙しいからと言って、服を着ないで裸で出歩いたり、貧しいのでご飯は食べないという人は昔からいない。何故かといえば、それはこれらが人の当然であり、否応なしにせねばならぬことと人々が知り抜いているからである。しかしこれらはあくまでも外物であり、人の人たる本質ではない。貧しくて服が着られなくとも、立派な人の価値が減るものでもなく、道のために貧窮し、満足に食事を取ることができなくとも、君子は君子である。それでは学はどうであろうか。学は人が本法の人たることではないか。これは人としてせずにはおられぬこと、止むにやまれず行ふものである。先生の教えられる学のいかに純粋なことか。神よりそのいのちを受け継ぎ来たりし人が、神

の生みのままの人たらしとする。内から自然と発してくる真の人たらしとする祈りが先生の学問の唯一の動機なのである。私はここに先生の純粋さを深く感ずる。己の利益の為に学問を利用する俗物は論ずるに足りないが、国の為、公の為に学問に励む志ある人々もこれまでの純粋さを見せられると、己を省みざるを得ないであろう。この純真なる求道の精神こそ崎門学の原動力であり、我々崎門学を学ぶものが己の内に見出さねばならないものであると思う。

「この書に大学と銘を切つてあるは天下古今の学の分廻しで規矩法則を示された書故ぞ。学の規矩法則の書と言うはこの書限つてのことぞ。」

「法と言うは一定して不動、抜き差しならぬことを言うぞ。古今に貫き宇宙に渡り、作意も細工もない人倫を本法の人倫にするところの自然の法じやと言うことぞ。」

学とは五倫の道を正しく歩む真の人たらしとするものであることが示されたが、この大学という書はその学び方の規矩法則が記されたものである。序文には「古の大学人を教うる所以の法なり」とある。この法というものとは一定不動、抜き差しならぬものであり、古今に貫き宇宙に渡り不変のものである。この作意も細工もない人倫を本法の人倫にする学び方こそ大学なのである。つまり、この大

学を読み、偏ることなき学の法を知ることによつて、真の人へと至る正しい筋道を知ることができるのである。志を立てた者で聖人君子を目指すものではないが、どうすればその地位に近づくことができるかが学者の最大の関心事である。現状の至らぬ自分を憎み、古の先哲をいかに慕おうとも、畢竟この学の法が分からなければ、その志は夢で終わる。あるいは自己流に学べば、いつ老荘になろうやら、俗学になろうやら分からない。そこに至る正しい筋道を知ること、志のあるものが皆切望する学の法がここにあるのである。そこで先生のこのお言葉が出てくる。

「もしこの大学が後世に伝わらずば、この紛らわしい世の末に何を以て学の目当てとして本法の学をなさうや。この書が今に残つてあるはさてさて大事なことぞ。」

正しい筋道を知らなければ、いかに志が高くとも聖賢の地位に到達することはできない。この書が残つてあるはさてさて大事なことぞと言われる先生のお言葉には力が籠つている。

「だいたい治教の全体がこの学で繋いである故ぞ。この学が明らかになれば、唐虞三代となり、この学が廃れば春秋戦国五季となる。治乱興廢ただこの学にかかつてあることを示されたぞ。」

世の治乱興廢全てこの学にかかつていることを示された。日本においてはこの学が明らかであるか、それとも暗んであるかによつて、神武天皇の御代の如く、八紘為宇の使命に燃える本来の日本となるのか、現代の如く他国に従属し、肉体的安楽に墮した退廃的日本になるのかが決まってくる。学の一字にかかる重さ、道を明らかにするもの的大いなる責任を先生が説かれている。一心の純粋なる求道の心に基づき聖学は、ここで国家的、世界的使命と結びつく。己の内深く求めて行く学は、外には広く天下を支える柱となることが分かる。

ここまでで、学問とは何であるかということが総括的に示されている。この学とは何ぞやということは先生が講義の中で繰り返し繰り返し説明されることであるので、学とは何か、なぜ学ぶのかを常に自分に問い質すことが大切であることが分かる。次の段から本文の詳しい解説が始まるが、今回はここで筆を置くことにする。

勤皇志士、 有馬新七先生と崎門学 折本龍則

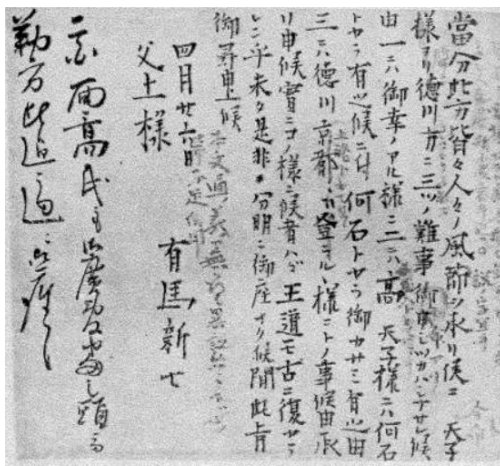
本稿は、来年の明治維新百五十年を踏まえ、『季刊・日本主義』第三十六・三十八号に連載した拙稿に若干の加筆修正を加えたものである。敬称は略す。

父への書状

「当分此方皆々人々の風節を承り候に、天子様より徳川方に三つの難事お申しつかはしなされ候由、一には御幸のある様に、二には高天子様には何石とやら御かさみこれある由、三には徳川、京都へ登らるゝ様にとの事候由、承り申候。実にこの様に候はゞ、王道も古へ復せられん乎。未だ是非分明に御座なく候間、此旨御尋申上候。」

これは天保八年（一八三七年）、ある薩摩藩士の子が十三歳の時に父に送った書状である。その薩摩藩士の名は、有馬正直、子の名を有馬新七、後に号して有馬正義という。天保八年といえば、大塩平八郎の乱や生田万の乱が起きた年であり、盤石を誇った徳川幕府の威光によりやく陰りが差し始めた頃ではあるが、いまだ誰もその終焉など予想しえなかった時代である。その当時の風説に、天皇陛下が徳川に対して三つの難事を仰せ出だされたというのである。その一つは、陛下が自

由に行幸あそばされること、第二に、朝廷の石高を増加すること、そして第三に將軍宣下のため、將軍自ら上京して、これを拝受すること、とする御要求である。慶長二十年の禁中並公家諸法度を始めとする徳川幕府の朝廷政策は、主として朝廷を敬して遠ざけるものであった。寛永三年（一六二六年）に三代將軍徳川家光が上京した際、二条城に時の後水尾天皇を御迎えしたのを最後に、文久三年（一八六三年）、孝明天皇が賀茂社に行幸されるまで、実に二百四十年に亘って行幸はなく、その間、天皇はあの狭い御所に押し込められていたのである。また幕府が朝廷に献上した御料は僅々三万石に過ぎず、全国で一千万石、徳川三百万石といわれた石高からすればその



新七が父にあてた書状

経済的衰微は覆うべくもなかった。さらに將軍宣下に関しても、上述した家光以来、徳川將軍による上京は文久三年に將軍家茂が孝明

天皇に拝謁するまで絶えてなく、歴代の將軍は江戸に居ながらにして將軍職を拝受してきたのである。この風説は虚説に過ぎなかったが、若き日の有馬新七が、そうした風説を言挙げし、もし事実がそのようであれば「王道も昔へ復せられん乎」と述べているのは、幼心に抱いた尊皇心の発露に他ならない。

有馬新七は、幕末の薩摩において精忠組の領袖として頭角を現し、文久二年（一八六二年）の寺田屋事件で倒れた尊攘の志士である。彼はしばしば「尊攘激派」と称され、猪突猛進型で後先顧みないタイプの志士と目されているが、その行動は深い思想的根底に根差し、公武合体論が主流の雄藩のなかでいち早く尊

皇討幕の旗印を掲げ、明治維新の端を開いた人物としての正當なる評価は寡聞にして知らない。そこで本稿では、行動派たる有馬新七の思想的面目に焦点を当て、なかでも彼の思想形成に与えた崎門学の影響について特筆することにしたい。崎門学は江戸時代前期の儒者・神道家である山崎闇斎が創始した学問であり、あくまで皇室中心主義に立ちながら、朱子学的な大義名分論を高唱することから日本的朱子学とも称され、幕末における尊皇討幕運動の思想的源流にもなった。後述するように、有馬新七はこの崎門学を根本思想に据え、自らの出処進退の指針とした。したがって、新七と崎門学の特筆することは、崎門学が有馬新七という人物を通して幕末維新史に及ぼした思想的影響を考察することに

もつながら。本稿は以上のような視点で記す。
立志まで

有馬新七は、文政八年（一八二五年）十一月四日、薩摩藩伊集院町の郷士である坂木貞常（通称、六郎）の子として誕生した。三歳の時に、父貞常が城下士である有馬家に入り跡目を継いだことから、一家で鹿児島城下に移住した。この有馬家は、むかし八幡太郎義家に従って奥州討伐に功があったとされる平正純より出で、この正純が摂津の有馬郡を賜ったことから有馬姓を名乗ったのが始まりと言われる。その後、正純の孫純長が島津家の始祖である忠久に従って薩摩に入り、その子孫に至って城下士に列せられた。代々有馬家では、正の字を通字として用いていたことから、貞常も正直と改名し、新七も正義と名乗った。新七の教育上、最初の感化を与えたのは、父正直や正直の弟で坂木家の後を継いだ叔父の坂木貞明である。正直は頭脳人に優れ六歳で唐詩選を暗誦した秀才であり、鹿児島藩校である造士館で七年学んだ。また叔父貞明も、十八の時、江戸に遊学して直真影流の免許皆伝を得た剣術の達人であり、郷土伊集院の子弟を懇篤に指導したことから、安政四年、英主島津斉彬によつて造士館の助教に拔擢された。この拔擢は郷士の身分としては異例であり、西郷南洲等鹿児島城下士も貞明には一目置いて、しばしばその下を尋ねたという。こうした父と叔父の薫陶を受ける

ことで、新七は文武両道、好学尚武の氣質を養っていた。

しかし天保二年、新七七歳の時に、正直は、近衛忠熙の夫人となった島津斉興の養女郁姫の御附を命じられ、京都に上ることになった（以来、正直は弘化四年に没するまでの十五年間の大部分を京都で過ごすことになった）。

このため、正直は新七の養育を近所に住む友人の佐藤隆盛に託し、以来新七は、この隆盛の懇切な指導のもとで読み書きを習い、また古今の忠臣義士の話を聴いて胸を躍らせたのであった。天保四年に父正直が帰国すると、他の薩摩藩士の子弟と同様に『論語』や『孟子』の素読を学び、やがて『三國志』や『太閤記』、『漢楚軍談』や『吳越軍記』等の軍記物語を愛読するようになった。なかでも新七が最も強い感銘を受けたのは『太平記』であり、彼はこの物語のなかで描かれた大楠公こと楠正成の忠勇義烈な生き方に感激し、その純忠至誠の精神に深い敬仰を寄せるとともに、自らも勤皇の大義と国体護持の責務に目覚めたのであった。冒頭で紹介した新七が正直に宛てた書状は、このころに書かれたものであり、大楠公から尊皇の洗礼を受けた新七の思想的萌芽を示している。ちなみに、この書状を新七が書いた十三歳は、高山彦九郎が『太平記』を読んで感激し、尊皇を志した歳と同じであり、後に「今高山」と称される新七と高山の不思議な因縁を感じさせる。

さて新七は、上述した思想的萌芽を培養

するに、崎門学を以て肥料としたのであるが、そのことを語る前に、まず、新七の生まれ育った土壌である薩摩と崎門学との因縁に触れねばならない。『有馬新七先生百年祭記念誌』昭和三十一年、鹿児島県伊集院町発行）に収められた「有馬新七正義」は、次の様に記している。「わが鹿児島に関係の深い僧桂菴の流れを汲む土佐の山崎闇齋が徳川時代の初めに京都に出て朱子学を講じると共に山崎流の垂加神道を説き、其の流れは浅見綱齋、若林強齋、玉木慎齋に伝えられ、慎齋の弟子井上祐珍は、鹿児島諏訪神社の神官であつた関係から、山崎闇齋の学統を薩摩に伝え、鹿児島藩士の尊王精神の涵養に資するのであります。また寛政四年（一七九二年）高山彦九郎が薩摩を訪れ、幕府を排斥して天皇を政治の中心とする日本々来の政治のありかたを実現すべきことを説いており、・・・彦九郎はこのときわが伊集院の町を通過しているのであります」。たしかに岡次郎氏の『崎門学脈系譜』を見ると、薩摩に崎門学を伝えた井上祐彦の後には、祐住、出雲、石見と、何れも井上姓の名が見える。また寛政の三奇人の一人である高山彦九郎もまた安藝の唐崎常陸介から崎門学の影響を受けた熱烈な尊皇家であり、この高山の入薩を通して、薩摩には崎門の学風がもたらされたと考えられる。それだけではない。鹿児島出身の白尾国柱という学者は、竹内式部の門人である伏原宣條という公卿に師事した崎門派の人物であり、「神代三陵考」

や「楠子伝弁義」、「倭文麻環」等を著して薩摩に尊皇精神を伝えた。周知の様に、竹内式部は、山崎闇齋の学統に連なり、幕府に対する皇権恢復の企てである宝暦事件で弾圧された勤皇の志士であり、彼の弟子である伏原は桃園天皇の侍講を務めていたことから、式部の教えを天皇に進講した。実は上述した高山彦九郎も、寛政二年に上洛した際に、伏原に師事しており、彼が入薩した動機の一つは、同門の白尾に会うことであつたとされる。この他にも、上原尚賢や山之内作次は、浅見綱齋の『靖献遺言』を推称して大義名分を唱え、上原は藩主斉興に進講し、久光幼時の教育を担当し、山之内は藩校造士館教授として薩摩に勤皇精神を広めた。ちなみに、上原の弟は平田助七郎という名で、靖献と号し、江戸で新七と同じ山口菅山に師事している。（昭和六年、渡邊盛衛編纂、『有馬新七先生伝記及遺稿』）

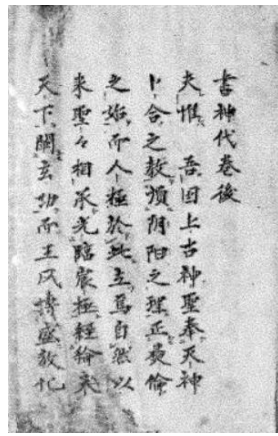
崎門学による精神修養

このように崎門学と浅からぬ因縁を有する薩摩の土壌で成長した新七が直接崎門学に触れたのは、天保九年、すなわち彼が十四歳で元服した頃に師事した面高俊陽の指導によって浅見綱齋の『靖献遺言』を読んだのが端緒である。面高は父正直の友人であり、藩主島津斉興の幼少時の御守役を務めた硬骨漢であつた。しかし主君への直言をも辞さない剛毅な性格が禍いし、文化年間の末に久保之正

と藩の政策を批判して屋久島に流され、赦免の後には伊集院に草庵を結んで薩摩の子弟を訓育していた。この面高と共に種子島に流謫された久保之正は『伊呂波御歌謹解』や『薩藩士風伝』を著した学者であるが、彼が子弟教育の書として殊の外尊重したのが『靖献遺言』であつた。『靖献遺言』は貞享四年（一六八七年）、山崎闇齋の高弟で崎門正統の学を受け継いだ浅見綱齋が著した書で、シナの忠臣とされる八人の事績と遺言を編述した書物である。君臣内外の義を嚴格に正すことから幕末における尊皇攘夷運動のバイブルとされ、志士にしてこの書を読まざれば肩身を狭くしたと言われる。新七の父正直と叔父貞明は上述した面高と久保の交友であつたことから、面高に新七の教育を依頼したのである。

翌、天保十年、新七十五歳の時には、崎門学における重要文献である『神皇正統記』や『保建大記』などを読み、君臣の大道の究明に努めた。『神皇正統記』は、南朝の忠臣である北畠親房が後村上天皇に献上した書であり、『保建大記』は、山崎闇齋の高弟である鶴飼鍊斎と桑名松雲に師事した栗山潜鋒が第百十一代後西天皇の第八皇子である八條宮尚仁親王に献上した書である。何れも天皇御歴代の治績を記した歴史書であるが、中世以降における皇威失墜の原因を、天皇の失徳失政に求め、朝政回復のための君徳涵養を説いた書である。さらに新七は、崎門学のみならず、山崎闇齋が創始した垂加神道にも関心を向

け、闇齋が『日本書紀』神代巻について講義した『神代巻口授筆記』など、垂加神道書を始めとする国典を読んだ。天保十二年、十七歳の時には、藩から造士館書役を命じられたが、学業を優先するためこれを辞退している。ところが同じ年に友人と喧嘩して禁足を命じられてからは、本居宣長の『古事記伝』を読み、闇齋による『日本書紀』神代巻の注釈書である『風水草』を書写するなどし、禁足を解かれた翌天保十三年には『書神代巻後（神代巻の後に書す）』と題する一文を認めている。



『神代巻の後に書す』

こうした新七の学問修養において転機となったのは、天保十四年九月、十九歳の時、兼ねてよりの志望であった江戸への遊学が叶い、崎門学の正統を継ぐ山口菅山への入門を果たしたことである。山口菅山は、浅見綱齋の弟子、つまり山崎闇齋の孫弟子にあたる若林強齋に師事した山口春水の孫である。この山口春水と云う人物は、崎門学の発展にとって重要な人物で、若林強齋に、その学塾である「望楠軒」の名の由来ともなった「仮初にも君を恨み奉るの心起らば天照大神の名をば唱ふべし」という楠公の言葉を紹介したこと

でも知られており、春水の孫である菅山も、上述した「望楠軒」を継いだ西依成齋及び畢山に学を受け、後叔父の岡畏齋に学んだ崎門学の泰斗である。その山口菅山に師事した訳であるから、かくして新七は紛れもない崎門正統の士、望楠学派の一員となったのである。この菅山への入門は、すでに京都において、鈴木遺音や梅田雲浜といった崎門人脈と交際があったとされる父正直の薦めによるものかもしれない。新七は弘化二年二月に上京するまでの一年有余を菅山の下で学んだ。

室鳩巢への論駁

望楠学派の碩学たる山口菅山の下で崎門学の研鑽に努めた新七の思想的成果を伺わせるのが、天保十五年（弘化元年）、新七が二十歳の時に著した『楠公論廻弁』である。楠公こと楠木正成は、後醍醐天皇による建武親政を輔翼した忠臣として知られるが、当時江戸幕府の御用学者であった室鳩巢は、その著『駿台雑話』のなかで、楠公の進退に忠義に悖る点があるとして誹謗した。かねてより『太平記』を愛読し、「望楠学派」の一人として深く公を敬仰していた新七はこれを読んで慨嘆し、逐一その所説を論駁したのが上述の書である。かつて高山彦九郎もこの『駿台雑話』を読んで憤慨し、腐儒何をかいわんやと言って同書を投げ捨てたとされるが、そのことが『楠公論廻弁』の注釈にも記されているのは、薩摩に尊皇論を鼓吹した彦九郎の思想的痕跡

を示すものであろうか。さても、以下にその内容について見てみよう。

まず鳩巢は、世の正成を尚ぶひとが、これを孔明に比するのには、両者が共に兵略を極め父子共に忠死したからであるが、その出処進退には異なるところがあると述べ、劉備による三顧の礼を待つてはじめて出處した孔明に比して、後醍醐天皇の召しに応じて笠置の行在に馳せ参じた正成の出處進退は議すべきところがある（軽率である）と述べたのに対して、新七は、これは鳩巢がシナかぶれの腐儒者で我が国の国体を知らないからだと反駁し、「漢土には匹夫下賤の者も王位を奪い、君をも弑する惡風俗の国にて、彼の王等の統の正しく仕うべく主も有り、逆賊の徒にて統の正しからぬ仕えまじき主も有るめれば、出處去就ちようことも有りて、其が統の正不正をも論うことも有りなむ。皇国は可掛くも綾に可畏き皇祖神命の事依さし定め給える随に、皇孫命の天地を統御給い四方に照臨座して天下所知食す大御国になむ有れば、臣子等は皇神を敬奉り、天皇命を畏奉り、朝廷辺を護奉り、雄々しき大和情を振起し、天皇命の伊賀志御稜威を四方に充満行い給える大御政を輔翼奉り、御食国を天と長く地と平けく聞食す事を、朝な夕なに祈奉りなむぞ当然の道にこそ有れ。然ればこの臣子等の天皇命に奉仕上るは、初めより彼の出處ちようことをかにかくと論うに及ぶまじき事なりかし。」と述べ、神皇の正統明らかなる我が国に於いて

は、出處進退の吟味など要らず、ただ朝廷御危急、皇国興廢の秋には勤皇の兵を起こして天皇辺に馳せ参るのが臣子の務めであると述べている。

また鳩巢が、正成は功名欲しさのために戦ったのだと述べたのに対しては、元弘の乱に際して天下の武士がほとんど北条幕府について勤王の者が少なかったなかにあつて、正成一人が大義を唱えて勤王の義兵を挙げ、わずか五百の寡兵を以て数十万の幕府軍を退けたことで天下の士気が鼓舞され、新田足利赤松が決起して幕府滅亡に繋がったことから、正成こそ建武親政の功勞第一というべきであるにもかかわらず、朝廷は足利を功勞第一とし、正成には檢非違使の官を与えるのみで昇殿さへもお許しにならなかった。それでも正成は、露ほども己が功業に誇る心なく、朝廷を憾み奉らなかつたばかりか、従容と湊川に赴き最期まで忠義の赤誠を貫いたのである。その正成を功名欲しさの人物と言うのは甚だしい妄論であると述べている。

さらに楠公が建武中興後、新田、足利諸氏の下に列して重用されなかつたのは、公の人格力量が劣っていたためであるとの批判に対しては、臣として任用されるとされないとは君の御慮りによるもので臣子等の与り知る所ではない。「三度諫めて聴かざれば則ち去る」というのはシナの風俗であり、我が皇国に於いては、臣子等はただ君を畏敬し奉り、才力の限りを尽くすのみであり、たとえ君に疎ん

ぜられても、どこまでも仕え奉るの他はないと述べている。この他にも鳩巣が、正成の軍略を反復常なき韓信のそれになぞらえ、公が湊川で自決するとき弟の正季と語った「七生賊滅」という最期の一念を「はなただけの陋なり」と述べたのを、新七は、公の忠義を知らざる所以として激しく難じている。

このように、新七は楠公の忠勇義烈な生き方の中に、我が国においてシナとは決定的に異なる臣子の道を見出した。それは君臣の名分を明弁して勤皇拳兵の魁を成し、姦賊を討伐するも、己が功を誇らず、たとえ主君に疎んぜられても、己が才分を尽くしてどこまでも君に仕え奉るということであり、これこそまさに楠公が言ったとされ、望楠軒の名の由来ともなった「仮初にも君を憾み奉るの心起らば天照大神の名を唱うべし」という言葉に現れた精神に他ならない。菅山から望楠の薫陶を受けた新七もまた、皇国たる我が国の臣道を体現した楠公の精神を継承し、自らも勤王の魁を成さんことを固く誓ったのであった。

こうした新七の楠公敬仰は、彼の精神を一貫して揺らぐことがなかった。安政三年（一八五六年）、再度の江戸遊学を許された新七は、鹿児島から都に向かう途中、兵庫の湊川にある楠公の墓所を参拝して感激措く能わず、次のような文を認めている。「臣として忠に死し、子として孝に死するは、此れ臣子の職分なり。天朝中葉より以還、皇道日に陵

遅し、名分明らかならず、士に全節なく、君臣の義欠く。独り楠公正成、誠神明に通じ、勲王室に存し、沢生民に存し、磊々落落愈々盛なり。後來朝廷を翼戴し節を致し義を守る者殆ど鮮く、公の節百鍊の剛なし。嗟哉、生と義と孰れか重く孰れか軽き。士たる者、豈に烈々轟々、大義を天下に倡へざらんや。余数百歳の後に生れ、公の人となりを欽望し、その祠に詣づること既に数回、毎に慨然として太息し、潸然として涙下る。嗚呼、公の時に遇はざるは、則ち実に天下万世の不幸なり。後人孰れか其の遺烈を継ぎ、復古の志を懷かん。五百年に必ず英雄の興るあり。今時は則ち然るなり。古祠の下過ぎるあらば、則ち子細に思量せよ。安政丙辰冬十一月、平武麻呂（新七のこと）謹んで書す。」

楠公社の創建

後に、万延元年（一八六〇年）、薩藩伊集院郷石谷で民生の開発指導を任されていた新七は、同地に楠公の祠堂を建立している。この時、新七が御神体として奉安した楠公の木像は、石谷の領主町田氏が、湊川の広厳寺にあったのを薩摩に持ち帰ったものとされ、さらにこの楠公像を広厳寺に納めたのは湊川神社を創建した水戸光圀であるとされる。この由緒ある御神体を奉安した楠公社の落成には鹿児島より大久保利通を始めとする多数の有志が参列し、翌年、新七が寺田屋の変で殉難して以降は、叔父の坂本貞明が祭祀を続けて

いたが、明治三年に西郷隆盛の主唱で御神体が鹿児島島の軍務局に遷され、軍務局が廃止された後は、西郷の私学校に遷され楠公社はその守護神として崇敬された。さらに明治九年には、宮之城地頭の辺見十郎太の請いで、宮之城に遷され今日に至っている（現在の楠木神社）。この遷祀は、辺見が鹿児島私学校における西郷の側近であり、その弟の宗介に嫁したのが新七の娘けさである縁故によるものとされる。（『湊川神社史・敬仰篇』参照）このように、楠公の精神は、新七を通じて薩摩に土着し、尊皇の気風醸成に与って力があつたことは間違いない。



現在の楠木神社

ところで、弘化元年（一八四四年）、一年有余にわたる江戸遊学を終えた新七は、薩摩への帰路に就き、途中父正直のいる京都に留まって、梅田雲浜や鈴木遺音など、同じく崎門同学の先輩との交流を深めた。梅田雲浜は望楠軒の講主も務めた崎門派の志士であり、後に安政の大獄で処刑された勤皇志士である。また鈴木遺音は、その門下、吉田東篁を

通じて橋本左内を生み出したことでも知られる。さらに京都滞在中の新七の心を強く打つたのは、弘化二年の新嘗祭に際して、畏くも時の仁孝天皇を拝し奉ったことである。これは新七の父正直が近衛家の郁姫の御附人であつた関係から実現したと考えられる。この機会によつて、それまで学問上で培われた新七の忠義は現実的な体認を得た。久保田収氏は、この出来事について「（有馬）先生の魂はこゝに大飛躍を見、始めて真の意味において、尊皇の志士となられたのであつた。先生の志士としての発足は、決して外国問題の刺戟によるものではなく、或はまた国民生活に関する正義感に出づるものでもなく、たゞ至純な尊皇心の発露にあるのであつて、このことは、先生が純正なる志士であることを示すばかりでなく、明治維新の由来するところが尊王思想にあつて、封建制度の行詰りや外国問題の発生に存しないことを明らかにするものである」と述べている。（『有馬正義先生遺文』）

教学刷新の希望と挫折

かくして尊皇の大義に目覚め、君臣の名分を正すことを以て己が使命と任じるに至つた新七であるが、薩摩に帰藩した彼を待ち受けていたのは、室鳩巣の学風に汚染され、シナ崇拜と訓詁詞章の学を専らとする藩校造士館の現実であつた。当時の薩摩は藩主斉興の下で調所広郷が権勢を振るい、藩校造士館は、

荻生徂徠の門人で室鳩巢の学を受けた山本正誼が学頭を務めていた。荻生徂徠は自らを「東夷」と称した程のシナかぶれであり、室鳩巢は、前述した通りであるから、その学風を受けた藩校の有様推して知るべしである。新七の自叙伝とされる『有馬武麿君伝』はこのときの様子について、「其の藩に帰するや、必ず大義を明らかにし名分を正すを以て念となす。語、朝廷の事に及ぶ毎に、則ち慷慨涕泗、常に千古の憾あるものゝ如し。時に、一権奸政柄を執り、正学を排拒し、忠直の士を忌諱す。且学風大に衰墜して訓詁の学を専攻し、力を有用の学に用ひる者無し。故に君（新七）の言論風采を聞き、愕然として驚き怪み、指して以て狂生となす。」と記している。

一権奸とは上述した調所広郷のことで、新七は藩校に容れられなかったばかりか「狂生」とさえ見なされたことが判る。

しかし嘉永四年（一八五一年）に藩主斉興が隠居し、英明の呼び声高い世子斉彬が襲封すると状況は一変した。斉彬は藩主に就くと弊政の改革に着手し、全藩の士に遠慮なく意見を上申することを認めた。これに藩士達は随喜し、西郷や大久保等少壮有為の若者は次々と藩政に関する意見を上書したが、新七も「貧富を均くし究民を賑し、黜陟の典を明にして賞罰を信にし、武を尚び衆士を督励し、名義明して上下の分を正し賜わむ事」を建言したとされる（『自叙伝』）。この意見が認められた為か、同年七月新七は藩より蔵方目付

に任ぜられ、齡二十七にして初めて仕官するを得た。（九月には妻お満との間に長男幹太郎が誕生したが、この出産が原因でお満は早逝した。）

さらに安政四年（一八五七年）、斉彬は教育学の刷新を図り、『学令十条』と称される告諭を発したが、その旨とする処は、まず「学問の標的は、修身齐家治国平天下の道理を研究、本末前後を知別いたし、然して当時の政務奉行候も、能く其の任に堪え候様に心掛け専要の事に候。文章詩作も儒者学問中一端の科業にて稽古尤もに候えども、専ら造士の法を相立て、正学の風を振起候様に學術厚く吟味然るべき事と存じ候」と述べて訓詁詞章の学を戒め、次に「第一、三綱五常の本領を守り、義理を明らかにし、名分を正し、各祖宗を敬尊し、生国之為に道を開き候儀、天理自然の本意に候処、当時儒者と唱え候中には、我皇国をも夷狄同様に心得違い、古典は勿論律令格式、亦は六国史以下に至り候ても弁別せざるの者も之有り候わんか。然れば孔子の道にも協わず、第一天照皇太神の御明慮も畏むべき儀にて右等の所一同深く分別致し学風をして振起せしめ、追々国用に相立候様、宜しく工夫有るべき儀専要に候。」と述べて君臣内外の分別を正すことを肝要とし、さらに「和漢の書籍のみならず、外夷防御第一の時節に候えば夷狄の状態をも能く識別致し彼の長をとり我の短を補い、上下一同心を合せ本朝の威武を拡充し、四夷制御の事、当時武夫

の急務と存じ候間、余力には西洋和解の諸書も熟覧し、外夷の風俗器械をも弁別いたし、我が羽翼となして、益々皇化万国に行き互り候様心得肝要に存じ候。」と述べて積極進取の気概を示したのであった。この告諭は、正しく新七が遵奉する崎門学の要諦と合致するものであったから、新七の感激は並大抵ではなかった。彼はこの『学令十条』を具現する方策として、造士館において華夷の分を明弁するためにシナの經史の他に国典を読んで我が国体を究明し、天孫を保護し奉った天兒屋根命を祀る神社を創建し、家老の中から学頭を選任して政治と教育を一体化し、演武館の師範の中から教授を選んで文武一致の実を挙げること等、九か条に亘る意見書を斉彬に奉じている。まさにこの時の新七は、英明なる主君を戴き、臥龍雲を得たる心持がしたのである。しかし不幸にもその翌年の安政五年七月、斉彬は俄に薨去し、新七は希望から一転、絶望の淵に突き落とされた。その翌月、新七は、斉彬の遺志を継承すべく『学令十条』を解説敷衍した『遺令演義』のなかで、「臣正義、愚なる身にあれど、竊に公の御盛意を畏み奉り、此の公の御供たまひて大君の辺にこそ死なめと、物部の雄心を思い充滿し居たりしに、まことに幸なくも今年七月十六日に公の身まかり給ひ、国中挙て惜愕き奉り悲痛み奉りき。あなや、公の御身は天が下の安危に係り給ふれば、ひとり我が藩の幸なきのみならず、実に皇国の不幸ともいふべきなり。

尊皇から勤皇へ

などや天つ神も公の御寿を永くし給はざるにや。歎息かるゝにも猶あまりあり。」と述べ、英主の死を悼んでいる。

さて、新七が勤王志士としての活動を開始する重大な契機になったのは、他の志士と同様、嘉永六年（一八五三年）六月のペリー来航であった。この未曾有の大事件に際して、新七は、憂愁措く能わず、直ちに藩当局に上書して、夷狄を攘除し、かつ兵を伏見大阪に出して、京都を警衛し、関東の変動に備えることを進言している。また、崎門の先輩で朝廷の儒臣であった大沢政五郎、中沼了三の両名にも書状を送って同様の意見を述べたが回答はなかった。そうこうするうちに事態は逼迫し、安政三年（一八五六年）には日米和親条約に基づいてアメリカ総領事のハリスが下田に来駐し、幕府に対して通商条約の締結を慫慂するに至った。新七は、もはや情勢を座視するに耐えず、再度の江戸遊学を藩に願い出で、同年（安政三年）十一月ようやく許可が下りると勇躍東上の途に上った。またその途次で滞在した京都では、同門の梅田雲浜を始め、諸国の人士と交わり、浦賀、鎌倉、水戸など諸国を歴遊して天下の情勢視察に努めた。江戸での新七は、藩命によって糾合方という藩邸の学問所に出仕、僅かながらも俸禄を給せられた。彼は最初、作事方下目付という別の役職を命じられる筈であったが、新

七の才学を見抜いていた藩主斉彬によって、比較的自由に学問と活動が出来る糾合方を命じられたのである。この江戸遊学中に新七は、『神風解』や『神武肇国の制度を論ず』等の論文を記して崎門学の蘊奥を披歴した他、諸国の志士と盛んに交流して人脈を広げた。

その頃、幕府では、病弱暗愚の將軍家定の継嗣として、聡明の呼び声高く尊皇心の篤い一橋慶喜を擁立し、朝意を遵奉して幕政改革と攘夷の断行を図る越前藩主の松平慶永、宇和島藩主伊達宗城、土佐藩主山内豊信、薩摩藩主島津斉彬らの一派（一橋派）と、紀州侯慶福を推す、紀州付家老水野忠央、彦根藩主の井伊直弼らの一派（紀州派）の対立が激化し、

安政五年四月に井伊が大老に就任すると、彼は朝廷の勅許を待たずに独断で通商条約に調印し、尾張水戸越前三藩の他、一橋派の諸侯を弾圧して慶福を將軍継嗣に据えてしまった。しかも井伊は、条約調印のことを朝廷に告げるに、現在の普通郵便と同等である宿次奉書を以てし、上洛して事情を説明する様にとの朝廷の命をも辞退して、老中の間部詮勝を代わりに上洛させたのである。この無礼に時の孝明天皇は、御譲位を思召されるほど激怒し給い、幕府による「違勅不信」の罪を責め、幕政改革を命じる勅諭（戊午の密勅）を水戸藩に降下した（この勅諭降下の背景に崎門派の梅田雲浜の運動があったことは、筆者の別稿『崎門学者、梅田雲浜』をご参照下されたい）。しかし、幕府はこの勅諭をも無視

し、かえって京都所司代の酒井忠義を上京させ、朝廷への圧迫を強める方策に出でたため、諸国の尊皇志士を激昂させた。

このとき江戸にあった新七も、井伊間部への対決姿勢を強め、一時は有志のなかで斬奸挙義の案も出たが、ひとまず有志の一人を上京させて江戸の事情を朝廷に奏上し、朝意を奉じて奸賊を除こうということになり、新七がその任にあたることになった。上京に際して、新七が叔父坂木六郎宛に記した書状は、まさに新七の遺書ともいうべきであり、この中で新七は皇国の為に死を致す悲壮な決意を述べ、一家の後事を六郎に託している。以下に全文を掲げる。

「君公御薨去遊ばされ候に付ては、誠に以て闇夜に燈を失い候心地仕候て、御同前何とも申し上げがたき儀に御座候。扱て爰許の動静も大いに變じ、井伊真部の姦賊共暴政、天朝の御趣意を背き奉り候次第、旁々不屈至極、兎角人臣忍ぶべからざるの砌に御座候に付、時宜に依りては、井伊真部兩人を打果し候手段も有志中にもこれあり候へども、右は控置候て右の賊共を退け候手段に心を尽し申候。私事も憚りながら少々志もこれ在候故、天朝の為に心を尽し候心組みにて、切角赤心を尽し申候。此期に當りて家を顧みるべきの時節にてはこれ無く、最早必死の格護罷在候。就いては心にかゝり候は老母にて御座候間、万一の事もこれ有り候はゞ、何卒老母一人丈は然るべき様合掌奉り候。何れ皇国の為に身

命を尽くし候儀、即ち君公の御遺志を継ぎ奉り候儀にて御座候へば、忠孝の道此より大なるはこれ無き義と存奉り候。尚此後に相変り候儀も候はば、巨細申上ぐべく、先は御願旁斯くの如くに御座候。恐惶謹言。」

内勅伝達の使者を拜命

安政五年（一八五八年）八月三十日の早朝、新七は江戸を発ち、九月七日夜には京都に到着、四条錦小路にある鍵屋という宿で西郷隆盛や、有村俊斉（海江田信義）、堀仲左衛門（伊地知貞馨）等の同志と会合した。翌八日には西郷の手紙によって来訪した勤王僧月照に江戸の事情を詳記した書状を渡した。この書状は月照から一橋派の公卿、近衛忠熙（たけひろ）に呈され、さらに畏くも覧覧に供されることになったことを月照から告げられた新七は歓喜した。この間、朝廷では上述した近衛忠熙が内覧を宣下され、三条実美や青蓮院宮等が朝議に参画するなど、情勢が一橋派にとつて優位に推移したが、これに危機感を募らせた幕府は、世にいう「安政の大獄」を開始し、梅田雲浜をはじめ、勤皇派の志士を次々と捕縛した。ここに至り、最早尋常の手段では時局を解決し得ないことを悟った新七は、斬奸義挙の策に決し、そのために有志の国主城主達に勤王の勅命を降下することを月照に説いた。特に越前土佐等の藩主は、以前水戸に下された勅諭の写しを拝見したいと要望しているから、この際、諸国に新たな勅命を下せ

ば、越前や土佐はおろか、長州や因幡の国主城主も奸賊討伐の為に蹶起すると思ったのである。そこで、近衛三条の両公はこの件について協議した結果、先の勅諭の写しを三条実万による直筆の書状と共に江戸の土佐藩主に下し、越前藩主へは土佐藩主から伝達させることに決し、この内勅伝達の使者として新七を任命したのである。朝廷がかかる大任を一介の薩摩武士である新七に与えることは極めて稀であり（父正直が近衛家に仕えた縁故に由るものであろうか）、新七はこのときの次第を記した『都日記』のなかで、「斯く朝廷の重き機密の御使いを、余が如き卑賤しき者に命じ給へる御事、時勢とは申しながら誠に恐い辱きこと、何と言奉せむ便もあらず」と感動を述べている。

かくして幕府の探索迫るなか、新七は東下の途に就き、西郷は月照を庇護して奈良に向い、両雄は東西に袂を別つた。その後、西郷が月照を抱いて錦江湾に入水したことは周知の通りである。一方の新七は、無事勅書伝達の大任を果たし終え、江戸にある越前の橋本左内、三岡石次郎（後の由利公正）、水戸の鮎沢伊太夫、原田八兵衛、長州の山縣半蔵、土佐の橋詰明平、高松の長谷川壮右衛門、同藩では日下部伊三次、堀名嘉仲左衛門、久木山行達等の有志と、井伊間部要撃の策を謀議した。そして同年（安政五年）十月の井伊登城を期して斬奸を実行することに決したが、期日を遷延するうちに、越前侯（松平春嶽）

が自ら京都に潜行し、朝廷を護衛し奉って井伊らの奸賊を討つとの報が入り、急遽予定を変更して大阪城代の土屋采女正（寅直）の関東下向を止め、さらに因幡藩主（池田慶徳）に義拳を説いて都に戻り、都の動静を探ることになり、西上の途に就いた。しかし、この道中は幕府の探索嚴重を極め、危難に満ちたものであり、上述した『都日記』には、新七が荷物のなかにわざと艶書（エロ本）を入れて幕吏の目を欺いたことなどが記されている。かくして何とか京都に到着した新七であつたが、彼に同行した桜任蔵は追手の迫る新七の身を按じてしきりに帰国を勧めたため、新七は帰国の振りをして京から船で伏見に潜行し、時折都に上つては当地の形勢を探索した。この伏見潜伏の間にも、在京の老中間部詮勝は、京都所司代の酒井忠義に命じて朝廷への迫害を強め、幕府の暴逆止まる所がなかったが、同じ頃新七が詠んだ「荒びなす醜の醜臣打払ひ肇国しらす御代に復へさむ」等の歌は、彼の心事があくまで皇政復古に存したことをよく表している。

そんな中、因幡に下つた桜任蔵から、一度挙兵の際には因幡から応援の兵を出す旨の手紙に力を獲た新七は、長州の山縣半蔵と共に三条実方に上書し、参勤交代で江戸に向う藩主島津忠義の一行を伏見に止め、越前長州因幡の諸藩と呼応し、皇居を守護して、間部酒井等の奸賊を誅戮する斬奸義拳策を説き、さらに伏見に到着した藩主に上書して、病気を

理由に江戸行を延引する間に薩摩から決死の士五百人余りを召し集め、江戸と京都の東西で併挙して井伊間部酒井等の奸賊を誅戮し、しかる後に夷狄を攘除することが先君斉彬公の遺志であると述べた。しかし、この上書のために、新七はかえって薩摩への帰国を命じられ、「朝廷辺に死ぬ可き命ながらへて、帰る旅路の憤ろしも」の一首を残して空しく西下の途に就いたのである。時に安政五年十二月十一日のことであつた。

薩摩での不遇時代

薩摩に帰藩した新七は、藩当局の嫌疑を避けるべく、しばらくの間、雌伏韜晦していたが、その間も秘かに有志と謀議して、江戸にある有村兄弟（次左衛門と雄助）等薩摩藩有志が水戸藩有志と連携して井伊を誅殺し、それに呼応して薩摩にいる有志数十人が朝廷守護に馳せ上る計画を進めていた。新七等有志一同は、あくまで挙藩勤皇による挙兵上洛を希望していたが、斉彬亡き後の薩藩当局は因循姑息に堕し、とても大事を図るに足る状況ではなかった。そこで彼らは、かくなる上は突出も止む無しとして、脱藩の上、江戸での義拳に応じることに決し、時機の到来を待ったのである。このことを知った、藩主茂久（忠義）は父久光と謀って自筆の諭告を発し、そのなかで先君斉彬の遺志を継いで挙藩勤皇に努めることを約すと共に、新七等有志一同を「精忠士面々」と呼んで称賛し、何とか彼ら

の脱藩を思い止まらせた。このとき新七等が藩主に上つた請書には、新七を始め、大島流刑中の菊池源吾（西郷隆盛）や在藩の大久保正助（利通）、堀仲左衛門（伊地知貞馨）、有村俊斉（海江田信義）等、総勢四十九人が名を連ね、後に彼等は「精忠士」に因んで「精忠組」と称され、薩摩における尊攘派の中軸と目されるようになった。その後も、新七等精忠組諸士は、しばしば薩藩当局に上書し、江戸での変に依じて出兵し、挙藩勤皇の約束を実行する様建言したが、久光はこれを「無名の帥」といつて斥けたばかりか、万延元年（二八六〇年）三月三日、ついに桜田門外で井伊が誅殺されると、その首謀者として薩摩に帰国した有村雄助に自害を命じ、折から参勤交代で江戸への途次にあつた藩主茂久（忠義）は、駕を返して帰国してしまった。この因循姑息な対応に対する新七の失望と憤慨は推して知るべく、彼は手記に「我等言を尽くし智を竭くし建言候とも、遂に用いなされ候儀は、最早之無く覚え候事」と述べて長太息するの他はなかった。

当時新七は、既に前述した伊集院郷石谷の領主町田氏から依頼されて、同地の民政および教育の指導に当たっていたが、これは町田氏が江戸への遊学中、糾合方において新七の指導を受けた縁故によるものとされる。この石谷退去の間、新七が町田氏から譲り受けた楠公の木像を御神体として同地に楠公社を創建し、尊皇心の作興に努めたことは前述の通りであるが、他にも民衆に五人組を作らせてお互いに助け合い善を励ますようにし、戸口を調査して租税の法を定め、悪事を働いた者にはぬかるんだ坂道に石を運ばして舗装させるなど経世の手腕を発揮した。今年（平成二十九年）四月十一日、筆者は石谷を訪れ、楠公社社跡や、上述した石坂等、新七所縁の地を回った。そこは鹿児島中央駅からバスで四十分ほど離れた場所に位置し、遙かな山稜の景色が広がる閑閑な田舎町といった所である。楠公社跡は、鬱蒼たる竹藪に覆われた丘の参道を登った先に現れ、「楠公社」と書かれた石碑が当時の面影を伝えていた。石碑の前に佇み、合掌瞑目すること暫し、気が付くと折からの雨も上がり、竹が風に摺れる声と共に、時折日差しが石碑を照らす様は、さながら新七の英霊が降臨したかの様であつた。今からおよそ百五十年前、同じ場所

で新七は何を祈ったか。石谷での生活は一年半に及んだが、それは天下に大義を唱える新七には、長い鬱屈と煩悶の日々であつたに違いない。彼は、その間も再三、藩主に時務を建築して出馬を促したが一向に聞き容れられなかった。新七は、もはや挙藩勤皇を期待できない今、父正直の縁故がある近衛家に奉仕する道を模索し、楠公社に願文（祈願文）を捧げて、朝権恢復、夷狄攘除のために挺身せんとする壮烈なる決意を次の様に述べたのである。「正義朝廷辺に忠勤奉り志を遂げる幸なくは、かくて世に存命て空しく日月を送りな

むは、本意なき事にし侍れば、速に身死なむ。あはれ神の御恩頼に依て、死て後に荒魂振起し国賊を滅ぼしなむと、恐美恐美申す。」この願文は、新七畢生の大文章ともいいうべく、全文を引用したいが、ここでは紙幅の関係上断念する（全文は二十六頁に掲載）。ときに文久元年（一八六一年）九月四日、彼が寺田屋で斃れる前年のことであつた。しかしこの近衛家奉仕の計画も失敗に終わり、不遇の時代は続いた。



石谷の楠公社跡

そんな中、新七に一大転機が訪れた。それは、文久元年十月、薩藩に政変が起き、首席家老島津豊後など、従来の守旧派が斥けられ、精忠組の一派が藩政の中枢に参画したのである。なかでも大久保利通は藩主父子に接近して異例の大抜擢を受け、小松帯刀や伊地知馨香等と共に藩政の実権を掌握した。これによって、同じく精忠組の領袖たる新七も藩校造士館の訓導師（教授）に任命され、先君斉彬以来の悲願であつた教学刷新を実現する機会を得たのである。さらに島津久光は、つい

に重い腰を上げ、長年の懸案であつた上京出兵を決断するに至るや、その真意を探るべく、筑前の平野國臣や久留米の真木和泉といった勤皇志士が陸續として来薩し、新七がその折衝の任に当たつた。なかでも、平野國臣は安政五年初めて入薩して以来、万延元年の十月には伊集院にある新七の叔父、坂木六郎（貞明）の家に滞在し、新七や大久保、伊地知等の有志と面会した。さらに文久元年には真木和泉や清河八郎等と謀つて再度の入薩を果たし、小松帯刀に長崎で草した『尊攘英断録』と真木の上書を託して、藩主父子の出兵上洛を促したが容れられず、有名な「我が胸の燃ゆる想いに比ぶれば、煙は薄し桜島山」の歌を詠んで帰路に就いたのである。この帰路の途中で止宿した坂木六郎の家で面会したのが新七や田中謙介、柴山愛次郎、橋口壮介といった精忠組諸士であり、彼らは共に薩藩の訓導師を務め、精忠組のなかでも純正勤皇党として最急進派を成していたが、この平野との会見によって討幕拳兵の盟約を結んだ。

新七の討幕論

この平野との会見（文久元年十二月十七日）は、新七にとって、決定的な思想的、行動的転機を成したといわれ、それは第一に、新七が積極的な討幕論の立場を明らかにし、第二に、そのために薩藩主体の挙藩勤皇論から脱却して、平野等、諸藩の志士浪人との提携による武力討伐を志向する契機としての意味を

持つとされるのであるが、それらは既に彼の崎門学を中心とした修養によって出来上がった素地が、平野を触媒として表面に現れたものに過ぎない。

第一に、新七の徳川幕府そのものに対する否定は、数多い彼の著作の端々に伺われるが、例えば『遊歴中遇録』では、「徳川將軍二氏（織田、豊臣）の後にいで、其の成功を掠めて悉く天下を以て私有となし、海内兵乱止み、今に至る既に二百有余年。」とあり、また前出した『都日記』では、「偕て家康卿が乱を鎮められし功業は、固より大なる事称ふるまでもあらねど、苟も忠誠なる志し深く臣子の真の道を尽くさむとならば、皇祖命の事依し給へる随朝廷の御政を修正し、己臣たるの分を守りて畏み仕奉り忠勤あるべきことなるを、然は無くして、却て皇室の衰微え給ひしに乗て天下の政権を執り、彼の賊臣なる北条足利等が旧制に擬ひ、弥に己が権勢を振ひ、皇室をば益衰微せしめ奉るは如何ぞや。然れば家康卿は功の始め、罪の魁とも謂ふべきにや。」とあること等でも明らかである。

また第二に、彼は、石谷退去の間に記したとされる『勤皇問答』（文久元年十月）と称される一篇のなかで「小君臣、大君臣の別」を説き、次の様に述べているのである。いわく、「抑々皇国は皇祖神命の事依し賜ひし随に天皇命天下所知食す大御国にて、邇邇芸命天降座せる時に高皇産命天照大神命の御神慮以て、神々の殊に卓絶たるを御撰有て御附属

坐し、殊に天照大神の御裔座す三種の神宝を天位の御璽として授賜ひ、御口つがら豊草原の瑞穂の国は我が御子孫の歴々に知食して天地と共に無究るべしと御祝座て其の神勅の随に只今に至るまで天皇孫命の唯一日の如く御代知食し、其御附属座しける神々の御子孫も連綿と続き、其の御裔が世に弘り、また代々の天皇命の御裔の御子達に姓を下し賜り臣下の列になされしが、其が裔も殖弘りて今に至りて各其が御裔ならざる者なし。如此てぞ御国は誠の神国にて、天皇命は天神の御正統にて今宸極に現御神と照臨座し、各も我も誠に神の御裔なれば、普天率土かは皇民ならざらむ。然れば今各国の臣子らの各其が主人と仰ぐ所の国主城主等も、朝廷より看そなわす時は各朝廷の臣民ならざる者あらむや。故大君と申し奉るは天皇命御一人に限奉て、各国君と仰ぎ臣と畏は小君臣の義なれば、今かく零落し一匹夫の我等までも、各其姓は朝廷より賜へる姓にて、大君臣の大義たる大根元よりいへば、辱くも朝臣ならずや、然れば朝廷の御危難座む時には、楠命児島の臣の所為こそ臣子の規範には有りける。若し己が主人たるひと望観て勤王の志なくば、種々に諫言申し心の及ぶ程才力のあらむ限を尽し、それをも聴用ること無く宜はざる時は所為便なければ己一人なりとも朝廷辺に馳せ参りて忠死せむこそ、大義の分を詳にして能く事の変に所置る忠臣といふ辺し。」

このように、新七は、はなから幕府の存在

を否定し、皇政復古を念願としていた。またそのために「小君臣」としての狭隘なる藩意識を脱して、天皇の直臣たる皇民として「大君臣」の義に就くこと説いていたのであり、上記の様に、それらの素志は、平野との会見によって、積極的な討幕論、諸藩の志士浪人との提携による武力討伐論として固まったのである。しかし、久光以下の薩藩当局は、あくまで、公武合体、幕政改革を目標とし、その方法としては薩藩独自の力を以て事を成そうとして、他藩と結ぶことを欲しなかった。また、久光の意を受けた小松、大久保等は、事を秘密裏に運んで新七等、精忠派の同志にもその実を告げなかったため、新七は大久保等に不信任を抱き、次第に両者の間に懸隔を来すようになった。長年にわたる新七の建築が実り、久光は出兵上洛を決意したが、上述の通り、両者ははなから同床異夢を懷いていたのであり、寺田屋での悲劇はすでにこの時点で予定されていたとも言い得るのである。

義拳の計画

さて、平野との会見後である文久二年（一八六二年）正月、柴山と橋口は江戸に向い、その途中、九州で勤王志士達と会見して、義拳策を謀議した。当時における彼らの計画は、柴山等が日向佐土原藩士富田猛次郎へ送った書状に尽くされている。

「二筆啓上致候。然らば兼ねて盟約致候一大

事の件申し上げ候。今般和泉殿（久光）上京云々は追て御通報申し上げ候通りに相運び申し候。因て西国勤王の士申し合わせ、名分大義を明らかにし、鎌倉以前の大御代に挽回し、朝威を外内に輝すべきの時節到来に付ては、和泉殿上京以前に、勤王有志の勢を以て、城州伏水に義兵を挙げ、所司代酒井若狭守等姦計ある幕賊を斃し、和泉殿上京を待ち受け、錦旗を翻し、神州の基本を確定し、外夷を掃除し、朝廷を富岳の安きに置き奉らん、恐れながら先年来国賊のために宸襟を悩まし給ふ。承久元弘の乱にも及ばんとする時勢を一変し、叡慮を休め奉る基をなすべし。此の義拳に凡そ七百人を要するなり。肥後には宮部鼎蔵、蒲生太郎、轟武兵衛、鹿子木兵助筑後には真木和泉守父子一族、筑前には平野次郎、秋月には海賀宮門、豊後岡には小河彌右衛門、此の人々には我より直ちに盟約致し候。貴君には尊藩の同志を募り伏水の方にて御尽力相成りたく、また我々は江戸に罷り下り、安藤を斃し彼の地に於いて一挙の積り、東西気脈を通じ合わせ、一時両奸魁を斃し、彌維新の功を奏せん。若し此の機を失い候はば周天極地、大義を挙ぐるの機なからん。時は得難く、機は失い易し。因て要用のみ申し上げ候。」

すなわち、久光の上京に乗じ、九州の志士達と連携して東西で併挙し、「鎌倉以前の大御代」を挽回しようというのである。さらに彼らは長州の協力を求めようとし、薩摩にある

樺山三円は、周布政之助、久坂玄瑞に書を送り薩長の提携を説いた。そこで長州は来原良蔵と堀真吾郎を薩摩に派遣した。この時、新七は来原や堀と共に、同じく薩摩の事情を探るべく入薩しようとしていた小河弥右衛門や宮部鼎蔵等の一行と会見し、義拳を策して深く默契する所があった。また同じ頃、薩藩当局に拘留されていた真木和泉守とも会見して、心志の一致を確認したのである。こうした西国諸士との会見は、藩命によるものであったが、皮肉にも、それは藩の意向とは裏腹に、新七に諸藩の勤王志士と提携し討幕義拳を図る準備をなさしめることになった。

文久二年三月十六日、ついに久光は、小松、中山、大久保以下、九百八十余名を率いて薩摩を出発し、新七も伍長として随従した。出発に先立ち、新七は息子の幹太郎のために自らの遺書とも言ふべき『自叙伝』を記し、そのなかで「予、志大にして才疎く、位卑しくして言高く、百事成らずと雖も、然れども朝廷を尊崇し、忠敬を君父に尽くすの志情は万古も磨さず」と述べている。またこの際、彼は妻といと離別して身辺を整理したが、これを怪しんだ坂本六郎は、新七を追ってその真意を質したところ、新七は、皇政復古の魁となつて挙兵し、以仁王の令旨を奉じて宇治川で戦死した源頼政にならつて死ぬつもりであると答えたので、六郎は、「宜しかろう、それならば行け、充分にやれ」と言つて送別したとのことである。

寺田屋の変と新七の最期

久光の上京に先立ち、諸藩の勤王志士が続々と京阪に集まり、先に江戸に下向した柴山と橋口も江戸での義拳を諦めて京都に戻つて来た。彼らは、久光の伏見に至るを待つて、志士達結束して京都に入り、幕府派の関白九条尚忠、所司代酒井忠義を屠り、その後久光を要して錦旗を東海に進めることに決し、ただ久光の到着を待つのみとなった。久光の大阪到着は四月十日、十三日には伏見に上り、十六日に入京した。新七も久光に従い、十日大阪に着き、二十三日朝、秘かに大阪を発して船で淀川を遡上し、その夜伏見に到着、同地の寺田屋に投宿した。船中で橋口壮介が詠んだ、「大君の御代を昔にかへさんと、尽くす心は神もたすけよ。」の歌は、志士たちに共通する想いであつた。寺田屋には新七を主将格として、薩摩や諸藩の志士達が続々と来集し、蹶起の準備を整えた。久光は入京早々、浪士鎮撫の勅諭を賜い、志士の暴発を抑えようとしたが、新七等が大阪を脱したとの急報が入ると、奈良原喜八郎、大山格之助等、新七と親交のある計八名を鎮撫使に任命し、寺田屋に赴かせた。彼らは、寺田屋の一階の一室



寺田屋

七と親交のある計八名を鎮撫使に任命し、寺田屋に赴かせた。彼らは、寺田屋の一階の一室

で新七や田中、柴山、橋口と面会し、藩命によつて義拳を中止するよう説得したが、新七等はこれに応じなかつたため、そのまま斬り合いとなり、現場は悲惨な同士討ちの修羅場と化した。新七は、鎮撫使の一人である道島五郎兵衛と闘う内に刀が折れたので、道島を壁に押し付け、橋口壮介の弟吉之丞に「おいごと刺せ」と叫び、道島と共に串刺しにされて絶命した。橋口壮介は肩から乳にかけて斬られて重傷を負い、氣息奄々としていたときに、奈良原に水を水をと申したので、奈良原が水を飲ませると、彼は欣然と「嗚呼我等は死んでもなほ卿等あり、今より後、天下の事は卿等に頼む、よろしく頼むぞ」と言い終えて息絶えたという。奈良原は双刀を捨てて袴を押し肌脱ぎ、階上の志士達や階下の別室にあつた田中河内介、真木和泉に懇願して何とか義拳を思い止まらせた。後に寺田屋の変といわれるこの事件で死亡したのは、鎮撫使の内では道島五郎兵衛一人、志士たちの内、有馬新七(三十八歳)、柴山愛次郎(二十七歳)、橋口壮介(二十二歳)、橋口伝蔵(三十歳)、弟子丸童介(二十五歳)、西田直五郎(二十五歳)、田中謙介(三十五歳)は即死し、森山新五左衛門(二十歳)は重傷の後蘇生し、伏見の藩邸にて割腹、山本四郎も京都の藩邸で自刃した。この九人は世に殉難九烈士と称され、伏見の大黒寺に埋葬された。

かくして有馬新七は、寺田屋の変の文久二年四月二十三日、享年三十八歳を以て散華し



大黒寺にある殉難九烈士の墓(右端が新七)

た。事変の後、寺田屋に居合わせた真木和泉は、往時を偲んで「思ふことむずびもはてずさめにけり、ふしみの夏の夜の夢」と詠み、同じく同志の一人である平野國臣は、事件の翌年、大黒寺にある義士の墓を弔て「なかくに死にたる人ぞいさぎよき、生きてなし得しこともあらねば」、「あだなりと人はいふとも山桜、散るこそ花はまことなりけり」と詠み、桜の如く潔く死んだ同志を偲んだのである。さらに、元治元年(一八六四年)、南島より帰還した西郷隆盛は、伏見殉難九烈士の墓を詣でて、その標木の朽ち果てたのを見るに堪えず、自ら資を投じてその墓地を再建し、長男幹太郎の米國留学の面倒を見るなど、懇切を尽くした。想うに、西郷が「洛陽の知己皆鬼となり、南嶼の俘囚独り生を竊む」と賦した「洛陽の知己」とは、新七等の同志を念頭に置いていたのではなかつたか。新七は死後、薩藩から土籍を除かれ、直礫の格を以て死体埋捨の処分を下されたが、元治元年四月、大赦によつて土籍を復せられた。さらに明治二十二年、新七の英霊は靖国神社に合祀され、同二十四年には特旨を以て従四位を追贈されたことで、彼の名誉は回復せられたのである。

有馬新七先生楠公社願文

(文久元年九月)

可掛くも綾に可畏き楠神乃大廣前に恐み
恐美も申須。神の大御稜威は天地に光輝
き御徳者は萬世に周く充滿し、御忠誠者
宇宙に照徹坐し、永く我が天皇命の御の
御守と成賜ひ、大御は朝日の豊榮登に
榮坐て、外國乃夷狄等も畏み服ひ奉りし
を近年に至りて外國の夷狄等參來て畏く
も大御國奉汚らむとすらくを、征夷府の
執事等忠勤しき雄心を忘れ、所々の海邊
に商館を造り邪教寺を建て、彌荒びに
荒びなすを、今、現御神と天下所治食す
天皇命は英明く、武く坐て、彼の執事
等が曲事を深く憂ひ賜ひ、度々大勅命
下し賜ひ、内地を整え夷狄を攘除賜える
雄々しき宸襟坐しけれど可畏くも勅命を
畏美奉らず、朝廷を輕蔑奉り彌に曲事巧
み、天皇命は彌に宸襟、惱賜ひき。かく
宸襟、惱賜えるを諸國の國守城主等一人
も勤王の兵を起し大御國鎮奉り清米奉れ
る武臣もなく、一日一日に大御國は彌に
疲れ、天下、萬姓は彌に苦しむ、憤慨く
遺憾しき形勢になむ。かく災難の形勢
を神乃大御稜威以て荒ふる醜臣等を誅
ひ、夷狄を攘除て、大御國清米鎮米て、
皇命の宸襟靖奉賜へと奉祈。正義賤

しき避遠の微臣なれど、安政五年、戊午
の年秋長月に内勅命を奉護て關東に下
り其が後にも種々謀りて醜臣等を誅ひ、
夷狄を攘除の策に心力を盡し侍りしか
ど其事空敷成らず如此宸襟苦しく思食こ
と如何で何までも望觀奉るべき。速に京
に參上り荒びなす醜臣を討て朝廷邊に死
なまく欲し侍れど、京遠き避遠の微臣の
身にして、然かも所々に關守も嚴重な
れば、可爲便なく今度京の有志等に謀
り陽明殿より召上せ賜はむことを申奉り
き。此事成就ば諸藩有志の國々を語ら
ひ、勤王の兵を起て、宸襟靖奉らむ物ぞ
と思ひ侍りき。朝々夕夕に彌歎息き彌
憤り天地に充滿て一向に朝廷邊思奉れる
眞心を神も阿はれと聞食し、過けむ罪咎
は見直し聞直し賜ひて、武事に功業あり
て、武士の本意を遂げ、朝廷邊を令奉靖
賜へと祈禱申須事乃漏落むを幸ひ賜えと
恐美恐美申須。
辭別て祈申須朝廷邊に忠勤奉り、志を
遂る幸なくば、かくて世に存命て空しく
月日を送りなむは本意なき事にし侍れば、
速に身死なむ。阿はれ、神乃御恩頼に依
て、死て後に荒魂振起し國賊を滅しなむ
と恐美恐美申す。

文久元年辛酉秋九月四日

有馬新七平正義